青藍会会報

100

第100号
記念号

令和4年12月

徳島大学医学部医学科同窓会

心技体

徳島大学大学院医歯薬学研究部皮膚科学分野
教授　久保宜明

野鳥の飛翔

朝日を浴びて飛翔するチュウヒ（猛禽）です。

撮影　藤野和也（医学部27期）

2022年度
青藍会賞募集

青藍会では学術研究の発展と奨励のために
青藍会賞を設けています。

若手研究者の応募をお待ちしています!!

応募締切　2023年１月16日（月）

詳細は78ページをご覧ください

巻　頭　言

これからも青藍会会報を

青藍会会長
荒　瀬　誠　治（医学部20期）

はじめに私事を

私は昭和49年卒後すぐ皮膚科入局，７病院・３研究室での修行後，43才で母校教授，63才で市中病院長，69才で医業引退，72才で本会の会長に推挙されました。カルテをドイツ語で書いた旧世代医師です。

青藍会の今までとこれから

青藍会は徳島大学医学科（その前身も含む）で医学を学んだ人々の同窓会組織で，設立の趣旨は“会員相互の親睦・懇親を図るとともに，学術の向上をもって母校の発展に寄与する”です。今や会員数は6,500人を超え，全国14か所に支部組織を持ち，様々な医療世界で活躍する会員諸氏の活動拠点，情報ネットワークの中心になっています。このネットワーク内での出会い，情報のやり取りを元に同窓の親睦，連携が強くなってゆきます。新天地を目指す場合でも，そこには世代を超えた信頼できる会員仲間が必ずいます。会員間の医療者ネットワークとして青藍会を利用していただくとともに，次に続く後輩達のためにも，自分の持つ有益な情報を会員に open することをお願いしたいものです。それこそが，会員相互の親睦・懇親を図る上で大切なことです。母校を離れ活躍されている先生から，『青藍会とは同窓が繋がる場を提供し，連携の深化を介した互いの向上を実現する組織と考えます』とのお言葉をいただきました。その通りなのです。

一方，「青藍」の言葉には，本会設立当時の先輩諸氏がお持ちだった「臨床，研究の両面で，それまでの先輩の業績を凌駕，前進し母校のために尽くす後輩の輩出を期待する」との思いがこもっています。母校とは，蔵本の一隅で学び，研究し，世に最高の医療を提供しながら次代の若者を育てる人達の集合体です。私達はこの集合体で切磋琢磨する中で，自分の立場を自覚し，将来を決めてきました。青藍会はこの大きな集合体，それを形成する会員個人への支援を常に考え実行してきました。将来の青藍会会員である学生，医学科への協力・支援を行い，より素晴らしい卒業生，医療者を輩出しうる医

学部の発展に寄与したいからです。そのために各種支援，援助，助成，他を行ってきました。それらの効果は徐々に目に見える形で表れています。見事な卒業生の輩出，誇らしく思える母校の成果や発展は会員の喜びであり，心の充実，誇りの強化につながります。母校が自慢でき誇らしく思える母港になるよう，また青藍の２文字に込められた会員の思いが達成されるように私たちは惜しまず支援を続けます。

これからも会報

とにかく，青藍会の一員であることを誇りに思い，同窓仲間を慈しみ，母校を愛し母校の将来に期待を寄せる会員を今以上に増やすことが私達の使命です。そのためにも各支部会員を通じて後輩達に青藍会への働きかけを強める必要があります。会報とは，青藍会の全てを会員に伝える最高装置で，会員と母校，会員間の連携，等の根幹をなします。今までに積みあがった100冊の会報内には，会員諸氏の活躍ぶり，思い，喜び，悲しみなどの個人情報，医療世界の変容，母校の状況，方向性，突発した苦闘劇やそこからの脱出劇を含む変遷と歴史，それぞれの事象に対する青藍会の対処や方向性を示す情報までもが詰まっています。近年，会報内容の一部はデジタルに移行しつつありますが，飛び交う情報の内容が実感を持って受け取られる度合いは圧倒的に個人の手元に届く会報雑誌が強いのです。会報の充実と青藍会の充実が密にリンクしていることより，会員諸氏の力を借りながら密度の濃い会報誌を目指してゆきます。

目次

○題　　字……久　保　宜　明
○写　　真……藤　野　和　也
○2022年度青藍会賞募集
○巻　頭　言……荒　瀬　誠　治
○100号記念特別企画 …… 1
　座談会…… 1
　100号記念に寄せて ……桜　井　え　つ……23
　卒業生からのメッセージ……24
　在校生からのメッセージ……41
　支部からのメッセージ……43
　青藍会会報100号までのあゆみ ……48
○令和４年度青藍会総会（ハイブリッド開催）……58
　青藍会会長挨拶……荒　瀬　誠　治……58
　医学部長挨拶……西　岡　安　彦……59
　議事要録……60
　支部報告……61
　事業報告……64
　会計報告……66
　学術講演抄録……堤　　保　夫……70
　　森　岡　久　尚……71
　2021年度青藍会賞選考過程について……安　友　康　二……75
　2021年度青藍会賞受賞講演……齋　藤　　裕……75
○2022年度青藍会賞募集……78
○第39回青藍会・医学科講演会を開催……田　中　克　哉……79
　　田　嶋　　藍……80
○青藍会の助成活動
　医学科学生に手術着を寄贈……髙　木　康　志……81
　卒後臨床研修センターの活動報告……岩　田　　貴……82
○支 部 だ よ り
　東　京　支　部……伊　藤　滋　朗……83
　近　畿　支　部……播　村　佳　昭……84
　兵　庫　支　部……楢　林　　勇……85
○特　別　寄　稿
　徳島大学病理学教室懐古　Sic transit gloria universitatis !……檜　澤　一　夫……86
○会　員　通　信
　半過去と近過去……四　宮　孝　昭……88
　瀬戸大橋開通30周年その光と影……國　重　昭　郎……88
　古くて新しい病気……渡　辺　圀　武……89

1980年の外国語研究会……本　田　壮　一……90
卒後50周年記念事業に向けて（盟友小林君を偲びながら）……齋　藤　義　郎……91
卒後50年の記念すべき同窓会の開催を断念しました。（第18期生）……村　田　　豊……92
第40期　会員通信……山　田　博　胤……93
俳　　句……小　谷　雄　二・雫　　俊　一・駒　木　幹　正・真　鍋　正　広……94
○徳島大学の動き
徳島大学大学院医歯薬学研究部新任教授紹介……漆　原　真　樹……95
北　村　嘉　章……96
埴　淵　昌　毅……97
徳島大学病院新任教授紹介……松　浦　哲　也……98
加　藤　剛　志……99
○準会員だより 特別編 学生広報委員企画……福　本　和　生・倉　良　詩　夢… 100
○青藍会の動き
教授就任のご挨拶……楊　河　宏　章… 104
辻　川　哲　也… 105
石　川　正　和… 106
病院長就任のご挨拶……藤　永　裕　之… 107
青藍会人事（評議員名簿・支部長名簿・役員名簿・委員会名簿）…… 108
会員の異動について…… 113
物　故　者…… 113
青藍会会費納入状況…… 114
会費納入のお願い…… 115
事務局からのお願い…… 116
○投　稿　規　定…… 118
○編　集　後　記……橋　本　一　郎… 119

令和４年度青藍会総会（ハイブリッド開催）

令和４年度青藍会総会は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため，ハイブリッド開催といたしました。総会当日の内容をご報告申し上げます。

Ⅰ　開会宣言

副会長
大　串　文　隆（医学部24期）

ただいまから令和４年度青藍会総会を開催いたします。なお，本会は評議員会及び支部長会議もかねております。開会に当たりまして荒瀬会長からご挨拶を申し上げます。

Ⅱ　会長挨拶

青藍会会長
荒　瀬　誠　治（医学部20期）

本日は総会に参加いただきありがとうございます。コロナの影響下，今回も青藍会館での直接参加と各地からのリモート参加のハイブリッド総会になりました。距離的・時間的な制約を超えて各評議員の先生方も多数参加されるようになり，よかったかな，とも感じています。

私が桜井会長の後を引き継ぎ早２年が過ぎました。この間の青藍会の動きで変わったもの，変えたもの，変わらずに続けたもの，他の報告です。本会の財政状態は，桜井前会長らにより始まった改革で立ち直り，２年前にはやっと青藍会設立の趣旨に則っての行動が普通にできる状況になりました。ところがコロナで大学生活に大変化が起こり，入学式，卒業式はもとより，講義，セミナー，各種試験等のほとんどがリモートとなり，学生同士，学生＋諸先生方が集まる機会が激減しました。このような中では母校愛，同窓仲間，恩師への感謝，医学部で過ごした充実感等が醸成されるようにみえません。また，学生さんに青藍会の姿を直接に伝え，趣旨等に賛同を得る公的機会が全くなくなりました。放置すれば青藍会の存在すら忘れ去られると思い，学生らへの白衣授与式，卒後研修プログラム説明会，国家試験説明日等で無理やり時間を取ってもらい，青藍会の趣旨内容を伝えると共に，会費の一括納入他のお願いをしました。しかし会費一括納入率が大幅に低下したのが現状です。それだけでなく，卒業前の住所，卒業後の仕事部所や住所他を青藍会に知らせることに賛同しない卒業生も出現し，青藍会に何の思い入れもなく，連絡すら取ってくれない新規会員が増えたことも衝撃でした。大学医学部でも学生の卒業後進路等は全く把握できておりません。私は，日本各地に散った過去３年間の卒業生と直接会い，青藍会への働きかけをしなくてはならないと思っています。その時は，各支部の先生方のお力が必要となります。何卒よろしくお願い申し上げます。

荒瀬誠治会長挨拶

青藍会を認識していただき将来の active な会員を生み出すためにと，白衣授与，学生時代に基礎教室に参加し業績を残した学生に対する青藍会奨励賞，MD-PhD コース学生への奨励金・資金援助，海外留学支援等の学生支援をしてきましたが，今年より「青藍会からの術衣授与」を行い，会長他の役員も出かけて，青藍会意識をすり込めたらと思っています。嬉しいことは，会員の研究業績をたたえる「青藍会賞」では，賞金が一挙に100万円となり，青藍会賞が研究者の栄誉・実績につながると認識されるようになりました。特記すべきことに，過去の青藍会賞受賞者から，徳大医学部では３名，他大学医学部で１名の教授が誕生したのです。加えて今までの受賞者全員が active な会員になり，全てを次代に伝えようとしてくれた事実も心弾むうれしい結果でした。一方で，青藍会主催の講演会が２年連続で中止となったのは悲しいことでした。これだけはリモートでも良いとは考えていません。

青藍会設立の趣旨である「会員相互の親睦を図

る」に対する動きとしては，全国支部の集会活動，会員相互親睦会，各学年同窓会支援等もリモートか中止となり，会長としてたった１回だけ，東京支部総会にリモートで参加しました。「支部活動を活発にするために，支部会開催を通じて協力できることはなんでもする」と心に決めていましたが何もできませんでした。ここ数年間の卒業生の行く先は日本中に散らばっています。コロナ明けには各支部の方から若者会員，特に過去３年間の卒業生に強くお声かけいただき，彼らの参加を伴う何らかの会を開催していただきたいものです。そのためにも，本部にできるお手伝いはなんでもやります。

今日まで青藍会の全てを伝えてきた青藍会会報のより充実のために，あらゆることを行います。会報は今年で100号となり特別号を発行しますので，ぜひ楽しみにしていただければと思います。同時にまた，会員名簿も発行します。青藍会の情報交換や情報提供はホームページ充実で十分とお考えの会員がおられるかもわかりませんが，私は未だデジタル化に不信があり，アナログ情報の塊である会報，名簿こそが青藍会の基礎をなすものと考えています。

最後に，小西竹生氏を新事務長に迎え早1.5年がたちました。青藍会の全てを理解した上での会員の皆様との責任ある付き合いを軽々とこなし，煩雑になる業務内容，デリケートな個人情報の取り扱い等，事務局運営の活性化，業務改善，大学・各種組織・時には国相手の情報収集，他部局との付き合い等に，プロの事務長として役目を十二分に果たしてくれています。会長としては，本当に良かったと思っています。皆さまよりのご意見をきちんとお聞きし，間違いなく青藍会の中でいかすために頑張ってくれますので，これからも頼りにしてくだされば幸いです。

Ⅲ　医学部長挨拶

徳島大学医学部長挨拶ならびに現状報告

徳島大学医学部長
西　岡　安　彦（医学部34期）

青藍会の皆様には平素より大変お世話になっております。改めまして医学部を代表して御礼を申し上げます。私は，赤池雅史医歯薬学研究部長（前医学部長）の後任として令和４年４月１日より医学部長を務めております昭和63年卒（医学部第34期）（呼吸器・膠原病内科学分野）の西岡安彦と申します。

新しい医学部執行部では，副医学部長を２名体制とし，臨床系から橋本一郎教授（医学部34期）（形成外科学分野），基礎系から安友康二教授（医学部36期）（生体防御医学分野）に担当いただいております。同時に橋本教授には医学科長を務めていただいております。学部長補佐は従来通り６名で，教育関係担当が野間口雅子教授（微生物病原学分野），研究関係担当が常山幸一教授（疾患病理学分野），組織運営関係担当が髙木康志教授（脳神経外科学分野），財務管理関係担当が脇野修教授（腎臓内科学分野），渉外（国際）関係担当が西良浩一教授（医学部34期）（運動機能外科学分野），渉外（教育病院）関係担当が髙山哲治教授（消化器内科学分野）です。人事面においては，令和４年４月１日付で小児科学分野に漆原真樹教授（医学部41期）が着任されました。現在，耳鼻咽喉科学分野の教授選考中で，顕微解剖学分野，予防医学分野，血液・内分泌代謝内科学分野および泌尿器科学分野の教授選考を開始予定です。医学部の活動において重要性を増している寄附講座ですが，同年４月より高松市からの寄附講座「地域呼吸器・血液・代謝内科学分野」が新設され，合計13講座が活発な活動を展開しております。また，大学組織では度々行われてきました名称変更ですが，令和４年４月から大学院組織の名称を「医科学教育部」から「医学研究科」に変更しております。

教育面では，日本医学教育評価機構（JACME）による医学教育分野別評価を受け，国際基準に適合した教育カリキュラムの確立に向けて引き続き改革に取り組んでいます。直近の課題は，十分な臨床実習期間（72週以上）の確保，特に重要な診療科と位置付けられる内科，外科，精神科，産婦人科，小児科，地域医療／家庭医療における実習期間の延長で

西岡安彦医学部長挨拶

す。昨年度から前倒しで実施した卒業試験の統合により臨床実習期間の確保が可能となり，令和５年度の医学科４年生からの実現に向けて取り組みを進めています。青藍会の先生方が勤務する関連病院には，改めて臨床実習に関するご相談をさせていただく形となりますが，臨床現場で行う実習は医学生に大きなインパクトを与えており，学生からの評価が非常に高くなっております。ご協力いただいております先生方には感謝申し上げますと共に，コロナ対応等で臨床現場の負荷がさらに増大している中ではございますが，引き続きご協力をお願い申し上げます。

医学科では，平成31年度入試から「四国研究医型」という総合型選抜入試（当初は AO 入試）（８名枠）を始めております。基礎研究医あるいは臨床研究医として活躍するリサーチマインドを持った医師の育成を目的としており，将来大学教員としてのみならず，基幹病院でも主軸となって診療・研究に従事いただける人材を育てていきたいと考えております。教務委員会内に位置づけられた Student Lab 部会が中心となって学生にキャリアデザインを提示しつつ丁寧な研究指導を始めております。また，高大連携の講座を定期的に開催し，医学部が求める人材確保にも努めていく予定です。

ダイバーシティを意識し，国際化にも地域貢献にも広く対応できる医学部の教育・研究を目指すとともに，青藍会の発展にも貢献できるよう人材育成に取り組む所存です。引き続きご指導ご鞭撻を賜りますよう心よりお願い申し上げ，医学部長の挨拶とさせていただきます。

「追記」

青藍会総会での上記報告後，令和４年９月１日付けで，耳鼻咽喉科学分野に北村嘉章教授（医学部43期）が着任されました。

Ⅳ　議事要録

１　日　時　　令和４年７月18日（月）10：30～16：00

２　場　所　　ハイブリッド開催（青藍会大会議室，Zoom によるリモート）

３　出席者　　45名（会場26名・リモート19名）

４　議　題

（１）青藍会会員の現状報告

大串副会長から青藍会会員の現状報告があり，黙祷が行われた。

正会員数5,801名（総会員数6,640名，物故会員数839名）教授就任８名，病院長就任３名，青藍会出身教授95名

（２）令和３年度青藍会事業報告（64頁）

（３）令和３年度青藍会収支決算報告（案）審議の結果，原案のとおり承認された。（66頁）

（４）令和３年度医学部50周年記念事業募金会計決算報告（案）審議の結果，原案のとおり承認された。

（５）令和３年度青藍会館運営費収支決算報告（案）審議の結果，原案のとおり承認された。（68頁）

（６）令和３年度監査報告（66頁・68頁）

（７）令和４年度青藍会事業計画（案）審議の結果，原案のとおり承認された。（65頁）

（８）令和４年度青藍会収支予算（案）審議の結果，原案のとおり承認された。（67頁）

（９）令和４年度青藍会館運営費収支予算（案）審議の結果，原案のとおり承認された。（69頁）

（10）名誉会員の推薦について

荒瀬会長から，平成11年に徳島大学医学部精神医学分野教授に就任され令和３年３月末に退任された大森哲郎先生，平成11年に徳島大学医学部耳鼻咽喉科学分野教授に就任され，本年３月末に退任された武田憲昭先生について，長年，教育・研究・診療において徳島大学及び青藍会に貢献されたので，名誉会員に推薦したいとの提案説明があり，審議の結果，承認された。

（11）青藍会役員の選出について

荒瀬会長から，今年の総会で会長及び副会長が任期満了となることに伴い，玉置副会長，福島副会長の後任として，丹黒章先生，坂東智子先生にお願いしたい旨，また荒瀬会長大串副会長は重任，役員についても継続でお願いしたいとの説明があり，審議の結果，承認された。

（12）その他

太田房雄評議員（医学部13期）より，青藍会ホームページの改善要望等について発言があった。また会費納入の減少傾向は憂慮すべき点で，長期的観点より予算と決算を検討すべきではとの意見があった。

Ⅴ　支部報告

東京支部

東京支部長
上　田　　茂（医学部20期）

東京支部総会・講演会を３年ぶりにWebで３月12日に開催しました。石井保夫先生が会報６月号で報告していますように，21名が参加しました。小山文彦先生が「新型コロナウイルス関連ストレスとメンタルヘルス」のテーマで講演をされ，実際の症例に基づく対応策についてお話していただきましたので，皆様熱心に聴いていました。荒瀬誠治会長と赤池雅史先生からもお話していただき，青藍会本部と大学との交流を深めることができました。また，参加者の近況報告や西田玲子先生のソプラノ動画に随分盛り上がりました。

支部活動の充実を図るためには，幹事会の役割が大きいと思います。これまで年２回幹事会を開いて支部活動等について意見交換を行ってきましたが，COVID-19のため最近は開催していません。日ごろはメールを通じて連絡しています。

徳島大学の同窓会がびざん会と名称変更になり，オンラインびざん会が月１回開催されています。大学の取組み，研究や学生の活動等が報告されており，私もほとんど参加して，東京支部のメーリングリストでその状況を報告しています。徳島大学のHPでオンラインびざん会の概要が掲載され，また青藍会や他の同窓会のリンクも張るなど，大学が同窓会活動に熱心に取り組まれていますので，青藍会も積極的に交流を図ることが大事と思います。

関東びざん会が本年11月に開催され，東京支部が世話役をすることになっています。開催日時，開催場所などが決まりましたら改めてご案内しますので，多くの方に参加していただき有意義な集いにしたいと思います。

メーリングリストは，伊藤滋朗先生に管理していただき現在162名が登録されています。本部でも新卒の方に各支部への連絡について熱心に働きかけていますが，東京支部はまだ実績がありません。若い医師をサポートしますので，東京などで勤務，研修される若い医師がおられましたら伊藤滋朗先生（shigeo-i@nms.ac.jp）にご連絡ください。

今後の青藍会の課題について，幹事のご意見を伺いました。ある大学では卒業生に一生使えるアドレスを配っているので，検討してほしい，各支部でHPを立ち上げるのは大変なので，青藍会のHPを活用することを考えてほしい，などの意見がありました。

近畿支部

近畿支部長
播　村　佳　昭（医学部28期）

昨年に引き続き，総会に参加の機会を得ることができました。多くの笑顔に親しく接することができました。今年もハイブリッドでの開催で，種々設定などに大変なご苦労があったと拝察します。役員の先生方や事務局の皆様には頭が下がります。あらためて御礼もうしあげます。

さて，例年通り近畿支部会の会務報告を仰せつかりました。当支部では今年度も支部総会は開催できておりません。併せて支部会としての活動も行えていません。なんとか、今年こそは近畿支部でも総会の復活を，と願うばかりです。報告事項がない，ことが報告事項となって，これで３回目です。仏様のお顔はいかばかりでしょうか。本当は仏様の国が隣国（コーサラ）の軍事侵攻に対して，４回目は外交交渉をあきらめて開き直った，ことに由来するそうです。攻められたのは仏様の国の瑕疵とのことで，意味が違う気がしますが，とにかく次はありません。

現状では第７波といわれ，感染者数の大きな波も訪れています。不幸中の幸といいますか，感染力と重症度は相反しそうです。政府の方針では特段の行動抑制は行わないようです。毎度おなじ文言で失礼いたします。本号がお手元に届くころには，普通の世の中に戻っていることを期待せずにはおられません。

仏の顔も二度三度

兵庫支部

兵庫支部長
楢　林　　勇（医学部11期）

兵庫支部会として，荒瀬誠治会長，いつもメール，電話でお世話になる事務局の小西，小川，藤本様に感謝しています。

私は大阪医科薬科大学同窓会仁泉会の特別会員であり，神戸大学医学部同窓会神緑会の他学卒の正会員ですので，３つの同窓会を比較してみました。年会費は青藍会5,000円，75歳以上無料，仁泉会10,000円で特別会員も同じです。80歳になると会長より礼状と記念品が贈られて来ました。現在82歳で，以後無料です。神緑会は5,000円で，私は現在も支払っています。ただ，どの時点でも10万円納入すると以後無料です。

支部への援助は支部会開催に役立ち，たいへん感謝しています。支部は東京，近畿，兵庫のように大きな支部でなく，小さく分けて特に近隣地区では医師会があれば支部を作るのがいいと思います。青藍会の支部役員がたくさんできて青藍会活性になると思います。現在の支部長は開業医のクリニックの先生が多いので，事務量が大変です。

同門会報は，青藍会は以前のように厚くして頂きたい。現在は薄すぎに思います。

神戸大学の新緑会同門会誌はカラー写真でたいへん立派です。神戸はマンションが林立して建設業界の広告が多いです。なお，最新の同門会学術会誌からカラーをやめました。やはり費用の点でしょうね。円安の時代となり，海外の大学などへの留学や海外の学会出席は難しくなりました。

青藍会総会に歴代の医学部長が列席されて報告，講演をされていますが，病院長にも是非出席して頂きたく思います。

新型コロナが一段落すれば老，中，青の３学年の順に学年同期会・同窓会開催状況報告を各学年幹事，評議員にお願いしたいと思います。総会にあまり各学年評議員が出席されていないようなので青藍会の活性化になると存じます。

九州支部

九州支部長
武　井　実根雄（医学部27期）

九州支部は2020年の新型コロナパンデミック以後全く活動できておりません。九州支部の会員は本年４月に本部よりいただきました名簿によりますと181名になります。名誉会員としては精神科名誉教授生田琢己先生，細菌学名誉教授大西克成先生，福岡大学法医学教授久保真一先生（元徳島大学法医学教授），福岡徳洲会麻酔科木下修造先生（元徳島大学麻酔科教授）の４名がおられます。

コロナ前の2018年３月16日に博多駅近くの八仙閣にて開催した九州支部総会には当時青藍会の会長をされていた桜井先生をはじめ，小生も学生時代に精神科の講義を受けた生田名誉教授や，徳島大学の法医学教授から福岡大学の法医学教授に就任された久保教授もご出席いただき感激いたしました。ご出席はいただけませんでしたが，学生時代に細菌学の講義を受けた大西名誉教授からはご丁寧なお電話をいただき，医学生時代のことが大変懐かしく思い出されました。２年か３年毎の開催を目指しておりましたので，なんとか2022年度中に開催できるよう準備したいと思っております。会員への連絡に当たり住所や勤務先は頻繁に変わりますので電子メールが活用できると大変便利なのですが，なかなか把握が難しいのが現状です。青藍会から永久に使用できるメールアドレス付与のお話がありましたが，もし実現すれば大変助かりますので是非よろしくお願いしたいと存じます。私自身も卒業後長い間，目の前の仕事や私的な雑事に追われて，青藍会本部と連絡を取るような意識さえも無かったのですが，年齢を重ね多少のゆとりが出てくると，お世話になった母校や将来を担う後輩に貢献できることはないか思うようになりました。九州支部長を拝命して青藍会本部からご連絡をいただく機会も増え，本部の方々がいかに会員のために心を砕いておられるかがよくわかり，自らを叱咤する日々です。

第７波の最中とは言え，重症化の恐怖はほぼ無くなりコロナ終息も近いと強く感じております。アフターコロナの時代に青藍会の会員が大いに活躍し医療に貢献されることを願って，自分なりの後押しができるよう微力を尽くそうとの思いを新たにしております。今後とも九州支部をどうかよろしくお願いいたします。

Ⅵ　2021年度青藍会賞の発表および授与

徳島大学病院外科（消化器・移植外科）講師
　齋藤　　裕　先生（医学部53期）
演題　「ヒト脂肪由来間葉系幹細胞から超高機能肝細胞様細胞の創出」
座長　島田　光生　先生（75頁）

Ⅶ　学術講演

広島大学大学院医系科学研究科麻酔蘇生学講座教授
　堤　　保夫　先生（医学部43期）
演題　「本邦における悪性高熱症の検討」
座長　田中　克哉　先生（70頁）

徳島大学大学院医歯薬学研究部公衆衛生学分野教授
　森岡　久尚　先生（医学部45期）
演題　「政策課題の解決に向けた公衆衛生学の取組みの推進」
座長　上田　　茂　先生（71頁）

事　業　報　告

令和３年度　事 業 報 告（令和３年４月１日～令和４年３月31日）

［実　施　事　業］

令和３年４月６日（火）
徳島大学医学部医学科新入生歓迎会開催中止のため入学生114名に荒瀬会長のお祝いメッセージ，会報第95号，同第96号，青藍会だより第２号を贈呈

令和３年６月
青藍会会報第97号発行（5,520部）

令和３年７月11日（日）
令和３年度青藍会総会開催（ハイブリッド開催）

令和３年７月26日（月）
「香川征 前徳島大学長　前徳島県病院事業管理者 お別れの会」への寄付

令和３年10月４日（月）
徳島大学病院卒後臨床研修センターへの寄付

令和３年10月21日（木）
第38回青藍会・医学科講演会開催中止
「COVID-19との対峙　―私たちの経験と英知を集結して―」
講師　東邦大学医学部微生物・感染症学講座教授　舘田　一博　先生

令和３年12月
青藍会会報第98号発行（5,520部）

令和４年１月11日（火）
医学科４年生に白衣授与・Student Doctor認定証授与式に出席（荒瀬誠治会長）

令和４年３月10日（木）
青藍会だより第３号発行（2,000部）

令和４年３月11日（金）
医学部68期生（121名）に記念品（カード型モバイルバッテリー，会報第97号，同第98号，ようこそ青藍会へ，青藍会だより創刊号，第２号，第３号）贈呈

令和４年３月23日（水）
青藍会奨励賞授与（医学科６年次臨床実習後OSCE 優秀者表彰）

［会 議 の 開 催］

令和３年５月24日（月）
広報委員会（Zoom 会議）
⑴青藍会会報第97号の編集について
⑵青藍会会報第97号のホームページ公開・非公開（案）について
⑶青藍会会報第98号（令和３年12月発行）の掲載内容について
⑷青藍会会報第100号（令和４年12月発行予定）記念の企画について
⑸会員名簿（令和４年12月発行予定）について
⑹その他

令和３年６月14日（月）
役員会（Zoom 会議）
⑴各支部への経費支援について
⑵役員（広報幹事）の増員について
⑶名誉会員の推薦について（永廣信治先生）
⑷令和３年度青藍会総会について
⑸2021年度青藍会賞募集について
⑹青藍会会員名簿（令和４年12月）の発行について
⑺香川征前徳島大学長のお別れ会について
⑻その他

令和３年７月11日（日）
令和３年度青藍会総会・評議員会・支部長会議（ハイブリッド開催）
会議終了後，青藍会賞受賞者学術講演及び学術講演を実施
内容は会報第98号に掲載

令和３年８月26日（木）
役員会（Zoom 会議）
⑴青藍会会報第98号の編集について
⑵青藍会会員名簿の発行及び配布について
⑶青藍会だより第３号の発行について
⑷徳島大学同窓会連合会のニュースレター投稿への推薦者について
⑸医学科６年生に対する会費納入のお願いについて
⑹医学科６年生（新会員）の個人情報の提供について
⑺令和３年度卒業生への記念品について
⑻第38回青藍会・医学部講演会の開催について
⑼その他

令和３年11月24日（水）
広報委員会（Zoom 会議）
⑴青藍会会報第98号の編集について
⑵青藍会会報第98号のホームページ公開・非公開（案）について
⑶青藍会会報第99号（令和４年６月発行予定）の掲載内容について
⑷会員名簿（令和４年12月発行予定）の仕様等について
⑸その他

令和３年12月15日（水）
財務健全化委員会（メール会議）
⑴事務長の給与について

令和４年１月17日（月）
講演会実行委員会（ハイブリッド開催）
⑴第39回青藍会・医学科講演会の実施計画について
①開催日時・場所について
②講師について
③座長について
④予算案について
⑵その他

令和４年２月17日（木）
青藍会賞選考委員会（Zoom 会議）
⑴2021年度青藍会賞の選考について
⑵2022年度青藍会賞の募集について
⑶その他

令和４年２月25日（金）
役員会（Zoom 会議）
⑴青藍会会報第99号について
⑵青藍会会員名簿について
⑶青藍会だより第３号の発行について
⑷徳島大学同窓会連合会ニュースレター投稿への推薦者について
⑸各支部への助成について
⑹2021年度青藍会賞について
⑺令和４年度新入生歓迎会について
⑻令和４年度青藍会総会学術講演講師について
⑼令和４年度（第39回）青藍会・医学科講演会について
⑽青藍会 MD-PhD 奨励金の授与について
⑾その他
①令和３年度徳島大学卒業式・令和４年度入学式について
②青藍会事務局事務長の給与の改定について

令和４年度　事 業 計 画

1　新入生歓迎会（４月６日）
徳島大学の方針に準じ中止。
（荒瀬会長のお祝いメッセージ等を贈呈）
2　青藍会会報第99号（６月）・第100号（12月）発行・青藍会だより第４号（３月）発行
3　2022年度青藍会賞募集
4　青藍会奨励賞授与（７月・１月）
5　青藍会総会・評議員会・支部長会（ハイブリッド開催）（７月18日）
6　MD-PhD 奨励金授与･青藍会賞授与（７月18日）
7　青藍会スポーツ奨励賞の授与
8　徳島大学病院卒後臨床研修センターへの寄付
9　第39回青藍会・医学科講演会（10月20日）
10　青藍会会員名簿発行（12月）
11　白衣授与（医学科４年）
12　卒業生への記念品贈呈（３月）
13　役員会・各種委員会の開催
14　青藍会各支部総会への本部役員派遣
15　青藍会館の管理・運営
16　その他

総会風景

学術講演抄録

本邦における悪性高熱症の検討

広島大学麻酔蘇生学講座
教授　堤　　保　夫（医学部43期）

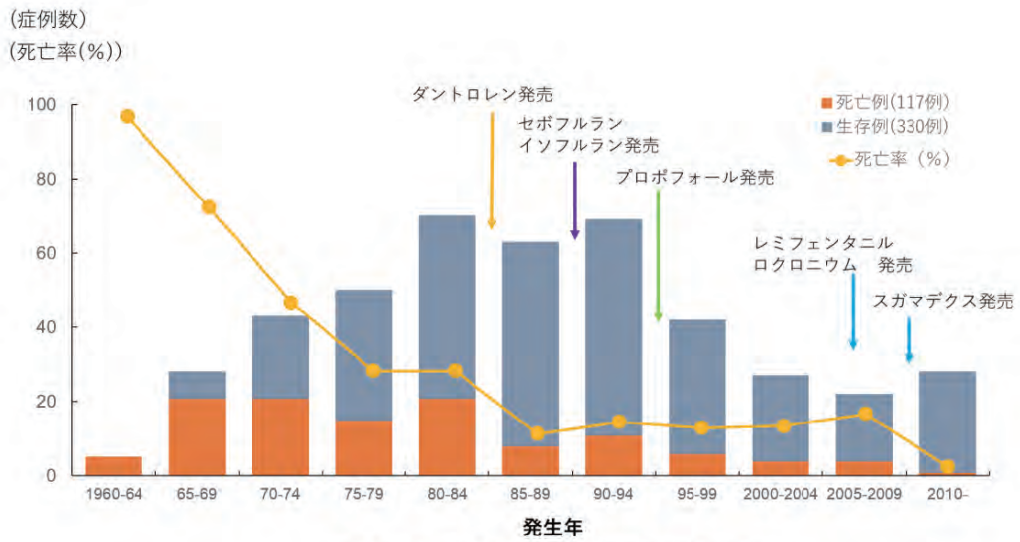
はじめに

1997年に徳島大学を卒業後，留学を挟んで麻酔科医として徳島大学およびその関連病院で20年余り勤務してまいりました。2019年に広島大学麻酔蘇生学に着任した後，広島で伝統的におこなわれてきた悪性高熱症の診断・研究にふれる機会を得ました。そこで今回は悪性高熱症について話させていただきます。

悪性高熱症（malignant hyperthermia：MH）は1960年代に初めて報告されてから本邦においても広島大学，埼玉医科大学を中心に診断・研究がなされてきました。揮発性吸入麻酔薬や脱分極性筋弛緩薬により誘発される遺伝性の潜在的な筋疾患で，MH素因の保有者が暴露することで発症することが知られています。しかしながらMH素因者に誘発薬を投与しても必ずしも発症するわけではなく，約半数の人が発症しないことがあり，発症する場合においても暴露から発症までの時間は幅広く，手術終了後に発症する症例も報告されています。発症後の症状は急激に進行し有効な治療を行わないと致死的になり，死亡率は約5-10％といわれており，手術前から素因があることがわかっていれば，誘発薬剤を避けて全身麻酔が行われています。しかし，素因患者であっても日常生活では症状がないことが多く，術前検査で診断をすることは難しいのが現状です。

病因は骨格筋細胞内のカルシウム調節異常で，骨格筋細質胞内のカルシウム濃度が上昇し，代謝が亢進（二酸化炭素産生と熱の産生の増大および酸素とATPの消費増大）することで体温上昇，筋強直，骨格筋の崩壊などが起こると考えられています。報告されているMHの発症頻度は，手術症例100,000に対し1.1～2.9と稀であるため，生涯を通して一度も本疾患を経験することがない麻酔科医も多いと考えられます。私が広島に転任後，2019年に徳島大学病院において生後16日の手術患者でMHが発症しました。翌年，筋生検を行い広島大学に筋肉を輸送，カルシウム試験（Ca-induced Ca-released test: CICR test），遺伝子検査を行いMHの確定診断を行いました。私が広島に転任していたこともあり，スムーズに連絡を取り合い患者の確定診断まで短時間で行うことができました。また，報告のあるMH患者では最年少ということで症例報告もさせていただきました。発症が稀で，近年は死亡率が劇的に低下したことより研究者も激減し，現在日本でCICR testが可能な施設は広島大学だけになっています。

近年，次世代シークエンサーの発達・普及により，MHでの*RYR1*（リアノジン受容体：骨格筋小胞



劇症型悪性高熱症の症例数と死亡率の年別推移

体上のカルシウム放出チャネル）や *CACNA1S*（電位依存性Ｌ型カルシウムチャネルのα1サブユニット）の変異が多数報告されてきています。MH 素因者の遺伝子検索では，約50％で *RYR1*に，数％で *CACNA1S* に MH 原因遺伝子変異が見つかっています。現在，ヨーロッパ MH グループ（European Malignant Hyperthermia Group）により MH 原因遺伝子変異と認定されている変異は，*RYR1*遺伝子の48変異と *CACNA1S* 遺伝子の２変異となっています。上記の徳島大学病院での MH 発症例では，珍しいことに，父母ともに遺伝子変異が見つかり，患者は両親から遺伝した２か所の変異を保有していることが明らかになっています。

広島大学麻酔蘇生学教室は日本において MH 診断を行ってきた数少ない施設であるため，何十年前からの MH 患者・家族の筋サンプルが多く保管されています。これらを用い遺伝子検索を行うことで，広島大学で同定された変異が MH 原因遺伝子変異と認定されてもいます。さらにまだ認定されていない変異もいくつかあり，今後これらの変異を導入した実験を行うことで認定を目指したいと思っています。

さいごに

このように広島大学麻酔蘇生学教室は，本邦における悪性高熱症の診断から研究まで幅広く行っている唯一の施設となっていますので，今後，手術に際し悪性高熱症疑いの患者が発症した場合にはご連絡をいただければと思います。

https://anesth.hiroshima-u.ac.jp/

masuika@hiroshima-u.ac.jp

政策課題の解決に向けた公衆衛生学の取組みの推進

徳島大学大学院医歯薬学研究部公衆衛生学分野
教授　森　岡　久　尚（医学部45期）

はじめに

2020年１月から母校の公衆衛生学分野を担当させていただいております。私が1999年に卒業してからのこれまでの取組み，公衆衛生学分野の現状，今後の研究の方向性について紹介させていただきます。

これまでの取組み

公衆衛生の役割には，健康に影響を及ぼす要因を疫学的・統計学的手法を用いて明らかにする科学としての役割，その科学的根拠に基づき，法律，予算などを整備する行政の役割の２つがあると考えています。これまでに，私は国（厚生労働省など），地方自治体（岐阜県，三重県）で公衆衛生行政に従事する一方で，日本大学医学部公衆衛生学分野で睡眠障害や母子保健についての疫学研究に取り組むなど，その両方を経験してきました。

公衆衛生行政においては，厚生労働省で母子保健課，老人保健課に比較的長く在籍しました。2010年７月に母子保健課に課長補佐として異動したときには，母子保健事業の一つである新生児マス・スクリーニングで，タンデムマス法という新しい検査方法を導入したモデル事業が実施されていました[1)]。タンデムマス法を用いると，新たに13疾患の先天代謝異常症が発見でき，将来，対象疾患の拡大に伴い発生する追加の検査費用もないという利点があります。モデル事業の内容をみると全国で実施する十分な科学的根拠はあるものの，都道府県での検査機器の整備費用の財源確保の課題が解決されていないように感じました。新生児マス・スクリーニングは，地方分権の一環で，乳幼児健診などの母子保健事業の多くと同じく地方自治体の独自事業（財源としては地方交付税化）と位置づけられており[2)]，厚生労働省が新たな補助制度を設けることは困難でした。紆余曲折を経て，総務省に地方交付税の増額の要望がなんとか認められ，2011年３月には都道府県に対して，タンデムマス法を用いた新生児マス・スクリーニングを積極的に勧める通知を発出することができました[3)]。私は，卒業後に母校の小児科学教室に入局し，黒田泰弘教授（当時，医学部12期）に推薦いただき，厚生省（当時）に入省しました。当時の教室で活発に議論されていました新生児マス・スクリーニングに関連する仕事をさせていただいたことが感慨深く感じています。

疫学研究では，日本大学医学部公衆衛生学分野の大井田隆教授（当時，故人）に指導いただき，２年ごとに行う全国の中高生（約15万人）を対象とした大規模調査（横断調査）や，2001年の出生児（約５万人）の縦断調査の解析を行い，論文を発表してき

ました。解析において検証を行う仮説は，その時々の公衆衛生行政の課題からヒントを得て設定してきました。例えば，2019年のラグビーワールドカップなどの日本での開催を控えて，屋内での受動喫煙対策強化の是非が議論されており，中高生を対象とした大規模調査の解析により，日本の中高生の受動喫煙の実態や，受動喫煙による健康被害を明らかにできるのではないかと考えました。そして解析の結果，約４割の学生が受動喫煙を経験しており，受動喫煙によっても不眠症の調整オッズ比が上昇することを明らかにしました[4)]。行政の業務をこなしながらの研究でしたが，両立に向けてサポートしていただいた大井田先生に感謝しています。

そのほか，2000年に上京してから母校に着任する前まで，青藍会東京支部の活動に参加させていただきました。特に，母校の出身で厚生労働省の先輩である上田茂先生（医学部20期）が東京支部長を務められていたこともあり，東京支部の運営にも携わらせていただきました。青藍会の多くの先生方が，母校から離れた地で活躍されていることを見て，また，時には的確なアドバイスをいただくこともあり，私自身大きな励みとなりました。

公衆衛生学分野の現状

1957年４月に設置された公衆衛生学分野（当時は公衆衛生学講座）ですが，直近の約20年間は人類遺伝学の研究に取り組んでおり，私の着任により再び公衆衛生学を研究のメインとしてスタートすることになりました。私のこれまでの経験を活かして，公衆衛生マインドを持った医師を養成するために社会医学実習の充実や，地域の保健医療水準向上に向けた活動，例えば地域の健康課題の解決に向けた研究や，その結果を踏まえた医師や保健師の育成に貢献したいと考えています。社会医学実習では，着任後，へき地診療所などの地域の医療機関，老人保健施設，障害者福祉施設，保健所などに実習施設を拡大しました。実習する学生も意欲的に実習に取り組んでおり，実習結果の発表会で活発に質疑応答が行われるなど手ごたえを感じており，今後も継続していきたいと考えています。実習受け入れから学生の指導まで多くの青藍会の先生方にお世話になっており，深く感謝申し上げます。

公衆衛生学分野で，科研費や補助金など公的な資金を得て実施している研究のうち，時に地域の課題解決に資すると考えられる研究について紹介させていただきます。一つ目は，徳島県における糖尿病対策の充実に向けた特定健診受診者の尿中アルブミンの測定と関連要因に関する研究です。徳島県では糖尿病の粗死亡率が全国的に高いことが知られていますが[5)]，県内で地域差があり，特に西部に高くなっている市町があります（図１）。そのため，徳島県美馬保健所の大木元繁所長（医学部34期）から，二市二町（美馬市，三好市，つるぎ町，東みよし町）が行う特定健診で糖尿病重症化予防の一環で尿中ア

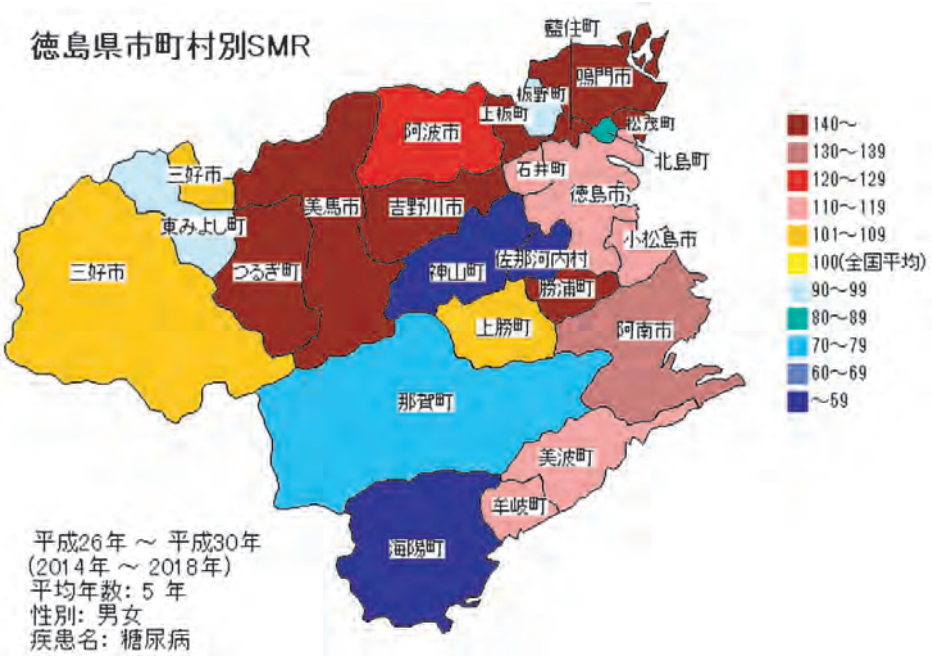
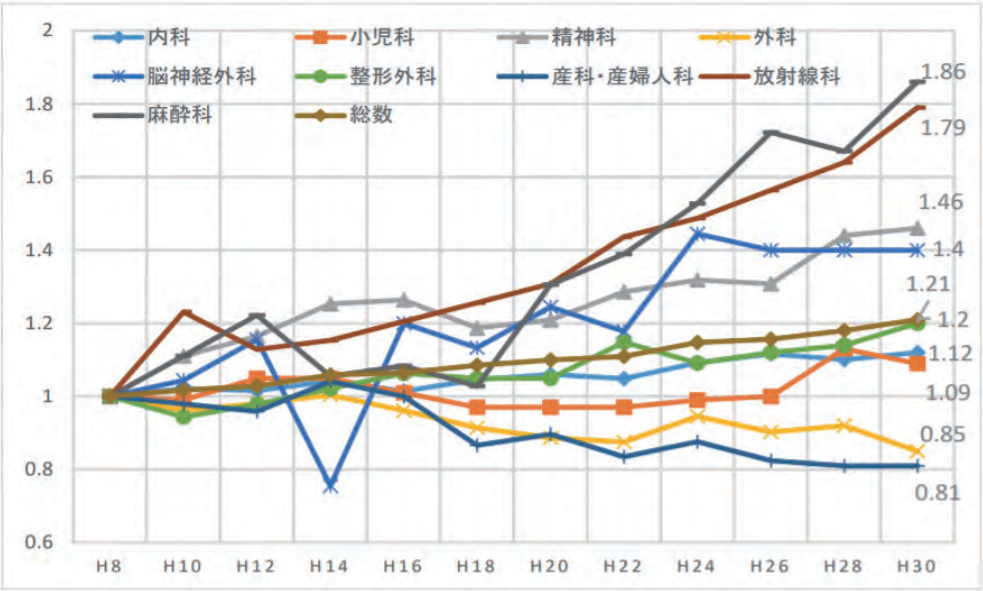


図１　徳島県市町村の標準化死亡比（糖尿病）（徳島県健康づくり課）

ルブミンを測定するので協力してもらえないかと依頼があり，取り組むこととなりました。尿中アルブミン排泄量のうち，微量アルブミン尿（30-299mg/gCr）は，糖尿病性腎症の早期発見に加えて[6]，血管の内皮障害を示す指標となることや[7, 8]，心血管疾患の予測因子であることが報告されています[8]。この測定により，糖尿病や動脈硬化性疾患における血管内皮障害に基づく糸球体（腎臓）の異常を早期に把握できることが期待できます。そこで，2021年度の受診者のうち本研究への同意を得られた方に対して，生活習慣に関するアンケートに記入いただくとともに，随時尿の尿中アルブミン排泄量を測定させていただき，特定健診の結果と合わせて解析を行うこととしました。新型コロナウイルス感染症の拡大を背景に，研究参加者の数は伸び悩みましたが，最終的に1,693例の解析を行うことができました。全体に占める微量アルブミン尿の陽性者の割合は男性が13.7%，女性が10.8%となりました。微量アルブミンと関連する要因を解析しており，クロス集計の結果では糖尿病，高血圧の患者で微量アルブミン尿の陽性者の割合が有意に高くなっています（$p<0.05$）。今後も，引き続き解析を行い，多重解析により，微量アルブミン尿と関連する要因を明らかにしたいと考えています。動脈硬化や血管内皮細胞の傷害と関連する症状や生活習慣などが候補になると考えています。

二つ目は，徳島県の小児科・産科医師の勤務環境の調査です。全国的に従事医師数は増加傾向にあることはご承知のことと思いますが，一方で偏在が顕在化してきています。徳島県においても，1996年（平成８年）から20年余りで，従事医師数の総数は増加していますが，小児科は微増で産婦人科は減少しています（図２）。このような状況の中で，働き方改革の一環で2024年度から医師の時間外労働の上限が設定されることとなっており（年間960時間，例外として1,860時間）[9]，対応の仕方によってはさらなる偏在の深刻化，医師の不足を招く可能性があります。そこで，徳島県医療政策課と連携して，徳島県の公的病院（14病院）とそこに勤務する小児科医・産科医を対象にアンケート調査を実施することとしました。2021年度に調査を実施し，14病院すべてと96名の小児科医・産科医から回答を得ました。これまでの解析では，小児科医・産科医のうち時間外労働が年1,000時間を超えるレベルは約４割，年2,000時間を超えるレベルは約１割，特に30代と50代，産科の医師が長時間勤務の傾向がありました。特に長時間勤務の割合が低いのは，複数主治医制やオンコール制が導入されている，バイタル測定や電子カルテ入力，診断書作成等の医療事務の分担がいつもできていると回答した小児科医・産科医でした。一方で，医療機関は年960時間以上の時間外労働をしている小児科医・産科医は12名との回答がありま



資料：厚生労働省「H30医師・歯科医師・薬剤師統計」

図２　診療科別の従事医師数の推移（徳島県，平成８年（1996年）を1.0とした場合）

したが，小児科医師・産科医師の41名は年1,000時間を超える時間外労働をしていると回答し，医療機関の勤務医師の正確な時間外労働時間の把握が課題であることも判明しました。今後は，小児科医・産科医のデータと医療機関のデータを連結させて，医療提供の状況と時間外労働時間などとの関連を解析したいと考えています。

今後の研究の方向性

現在取り組んでいる研究内容を確認いただいてもわかりますように，地域の医療・保健に関する課題の解決につながるような研究に取り組んで行きたいと考えています。研究の計画やデータの解析では，地域の医師，保健師などの関係者との対話を重ねて，そこからヒントを得たいと考えています。研究の成果は，可能な限り関係者にフィードバックして，地域の健康水準の向上に貢献できるようにします。先に紹介しました研究におきましても，途中の解析ですが，結果を関係者と共有し，解決策の協議を行っています。協議で出た意見を参考に，また違った視点からの解析に挑戦しています。今後は地域の医療関係者向け研修会の開催や，周産期医療協議会での検討の予定も決定しています。

今後の研究手法の一つとして，医療保険のレセプトや特定健診結果のデータを含む大規模データベース（NDB，KDB など）を活用した研究に取り組んでいきたいと考えています。幸いにも徳島県の過去５年分の国民健康保険の被保険者のレセプトと特定健診結果でのデータを入手しています。これをもとに，大規模データの検索方法の確立を目指し，まずは先の２つの研究と関連して，小児科・産科の医療需要の予測や，運動や食事などと慢性腎疾患，蛋白尿との関連を明らかにしたいと考えています。

私が着任してから２年余りが経過しましたが，研究，教育（講義，実習）は概ね順調に進んでいると感じています。公衆衛生学を指導できるスタッフの確保が当面の課題です。一朝一夕には解決しない課題ではありますが，粘り強く取り組んでまいる所存ですので，公衆衛生学分野の取組みにご理解とご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。最後になりましたが，青藍会の先生方の益々のご健勝とご活躍を祈念しております。

文献

1）山口清次．タンデムマス等の新技術を導入した新しい新生児マス・スクリーニング体制の確立に関する研究：平成21年度総括・分担報告書：厚生労働科学研究費補助金成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業．2009.

2）厚生労働省雇用均等・児童家庭局母子保健課長．「先天性代謝異常検査等の実施について」の廃止について．2001.

3）厚生労働省雇用均等・児童家庭局母子保健課長．先天性代謝異常の新しい検査法（タンデムマス法）について．2011.

4）Morioka H, Jike M, Kanda H, et al. The association between sleep disturbance and second-hand smoke exposure: a large-scale, nationwide, cross-sectional study of adolescents in Japan. Sleep Med. 2018；50：29-35.

5）徳島県．第５章 本県の保健医療提供体制，第２疾病に対応した医療提供体制の整備，４糖尿病の医療体制，第１糖尿病の現状．第７次徳島県保健医療計画．2018：139-140.

6）Mogensen CE. Microalbuminuria predicts clinical proteinuria and early mortality in maturity-onset diabetes. N Engl J Med. 1984；310（6）：356-360.

7）Deckert T, Feldt-Rasmussen B, Borch-Johnsen K, Jensen T, Kofoed-Enevoldsen A. Albuminuria reflects widespread vascular damage. The Steno hypothesis. Diabetologia. 1989；32（4）：219-226.

8）Clausen P, Feldt-Rasmussen B, Jensen G, Jensen JS. Endothelial haemostatic factors are associated with progression of urinary albumin excretion in clinically healthy subjects: a 4-year prospective study. Clin Sci (Lond). 1999；97（1）：37-43.

9）厚生労働省．第１医師の時間外労働の上限規制に関して，医事法制・医療政策における措置を要する事項，１地域医療確保暫定特例水準及び集中技能向上水準の対象医療機関の指定に係る枠組み．医師の働き方改革の推進に関する検討会 中間とりまとめ．2020：3-13.

2021年度青藍会賞の授与及び受賞講演

2021年度青藍会賞選考過程について

役員会学術委員
安　友　康　二（医学部36期）

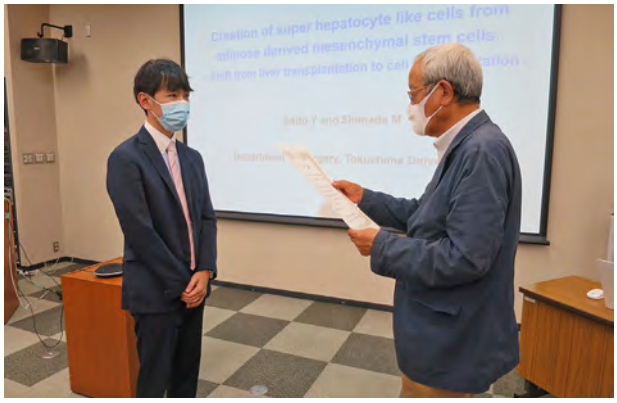
第29回2021年度青藍会賞の選考委員会は，令和４年２月17日に開催しました。今回は３名の応募があり，青藍会から事前に依頼しました６名の選考委員の先生方に書面審査をお願いし，その結果に基づいて選考委員による合議審査が行われました。なお，今回の選考委員長には委員間の互選により安倍正博委員が選出されました。

応募者３名はいずれも優れた研究業績をあげておられるという評価でしたが，徳島大学での研究における論文数・内容，および今後の研究の発展性について総合的な観点からの選考がなされ，全員一致で以下の１名を青藍会賞の受賞対象者として選考いたしました。

令和４年２月25日に開催された役員会において，審議の結果，承認されました。

受 賞 者

齋　藤　　裕　氏（医学部53期）
徳島大学病院外科（消化器・移植外科）講師



令和４年度青藍会総会にて

来年も引き続き積極的な応募をよろしくお願いいたします。

「ヒト脂肪由来間葉系幹細胞から超高機能肝細胞様細胞の創出
―肝不全・代謝性肝疾患に対する肝移植から細胞治療へ―」

徳島大学病院外科（消化器・移植外科）講師
齋　藤　　裕（医学部53期）

はじめに

この度は，大変栄誉ある青藍会賞をいただき，誠にありがとうございます。青藍会会長また，私の学生時代の医学部サッカー部部長である荒瀬誠治先生をはじめ，選考委員の先生方，また，青藍会の皆様には厚く御礼申し上げます。

肝細胞移植の限界

肝細胞移植治療は，欧米を中心に主に急性肝不全に対する肝機能補助や先天性代謝性肝疾患に対する酵素補充を目的とした治療法として行われています。尿素サイクル異常症のような代謝性肝疾患は，単一の酵素欠損が原因となるため，肝移植あるいは肝細胞移植が根治療法ともなり得ます。しかし，１）ドナー不足（余剰肝からのみ）の問題を中心として，２）移植後長期細胞生存率の低さによる頻回移植の必要性，３）免疫拒絶，４）門脈内投与後の門脈圧亢進・門脈塞栓のリスクなど，様々な問題に直面しており（図１），その根本的解決策としては，新たなドナーソースの開拓が挙げられます。

図１

ドナーソース 脂肪由来間葉系幹細胞（ADSC）

肝細胞のドナーソースとして，iPS 細胞・ES 細胞・間葉系幹細胞（MSC）が挙げられます。iPS 細胞における遺伝子的ダメージ・拒絶の可能性，また，ES 細胞における倫理的問題など，様々な問題点が指摘されており，臨床応用には未だ長い道のりです。これらの諸問題を解決するのが MSC であり，特に脂肪由来の MSC である ADSC は低侵襲かつ容易に患者から採取可能です。我々は，肝障害モデルマウスを用いて，ADSC 移植が，Trophic 効果（*Saito Y, Shimada M, et al. J Surg Res. 2013*）及び Homing 効果（*Saito Y, Shimada M, et al. JHBPS 2014*）を有し，術後肝傷害を軽減し，肝再生を促進することを既に報告しています。ただし，ADSC 移植のみでは，結局完全な肝細胞機能補填には至らず，長期的な肝疾患根治に至らず，肝細胞への分化誘導が必要となります（図２）。

図２

肝細胞様細胞（HLC）の分化誘導

肝細胞様細胞（HLC）は iPS 細胞・ES 細胞・MSC のような多能性幹細胞から分化誘導が可能であり，それらの細胞はヒト正常肝細胞に類似した機能を保持することが報告されています。３Step（胚葉転換，肝芽細胞誘導，肝細胞成熟）で，各 Step に key molecule 添加により約２−４週間で HLC は誘導可能であります（図３）（*Saito Y, Shimada M, et al. Surg Today 2021*）。肝細胞機能は，糖・脂質代謝，タンパク合成，胆汁産生，アンモニア代謝，薬剤代謝など多岐にわたりますが，すべての肝細胞機能を肝細胞と同等に保持するような HLC はいまだに作製できていません。よって，より高機能な肝細胞様細胞の創出が可能となるよう，教室で研究をすすめております。

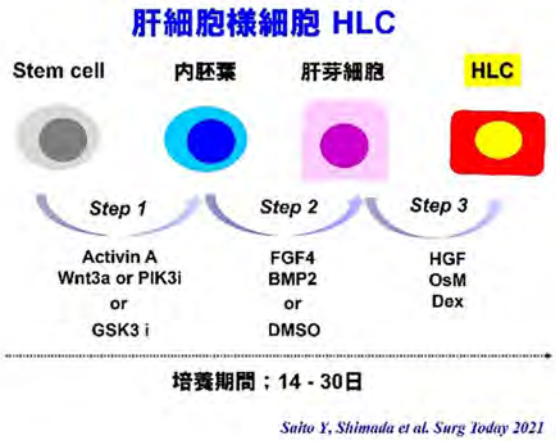


図３

Tokushima Protocol の確立

高機能 HLC 創出の工夫として，まずは，３次元培養法に着目しました。足場素材型の資材（RCP, FUJIFILM）を分化誘導の際に混入することで，

Spheroid を形成します。そのことで，肝細胞機能である Cyp3A4活性やアルブミン産生能が上昇し，特にアンモニア代謝に関しては，実際の肝細胞とほぼ同等の機能を有することがわかりました（*Saito Y, Shimada M, et al. JHBPS 2021*）。生体機能分野の親泊政一先生との共同研究で，DNA microarray 解析により，我々の3D HLC の遺伝的背景も明らかになりました（図４）。

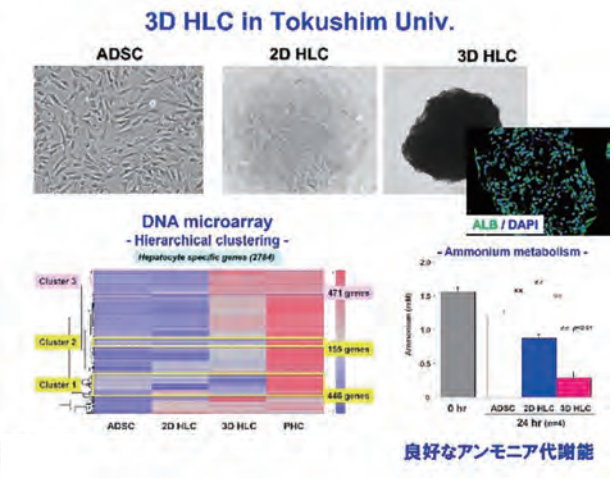
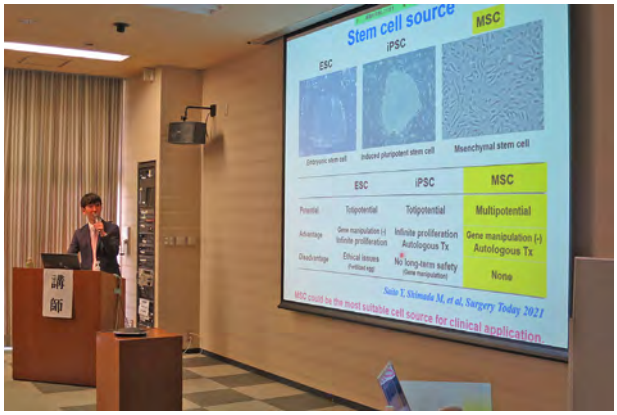


図４

さらに，分化誘導の際により特殊な物質（FXR agonist）添加，LED 照射，血管内皮細胞共培養によるオルガノイドの作成など，徳島大学オリジナルの Tokushima Protocol の確立を目指しております。

尿素サイクル異常症（特殊な疾患モデル動物）

尿素サイクル異常症は，難病指定された稀少疾患であります。発症頻度は１：8,000 ～ 44,000人と考えられています。アンモニア代謝酵素欠損以外は，正常な肝細胞機能を有しており，我々の HLC 移植がアンモニア代謝能を補填することで，肝移植・肝細胞移植が回避できるのではと考えております。現在，最も罹患数の多い OTC 欠損マウスに我々の HLC を移植し，その効果を検討している最中であります。また，OTC 欠損に次いで２番目に多いシトリン欠損症ですが，実はその大家である鹿児島大学名誉教授佐伯武頼先生は，徳島大学医学部を1965年にご卒業されており，何かのご縁でその疾患マウスを譲り受けることが可能となりました。まさに，この青藍会のつながりで，実現した共同研究であります。



今後の展望

今後は，尿素サイクル異常症モデルへの移植，投与細胞数，移植部位，さらには，HLC の免疫原性の確認，ならびに，PMDA による安全性有効性の獲得など，将来的には根治療法になるように，医師主導試験をできればと考えております。外科医は探求心を持つ研究者たるべきという脳外科医のカッシング氏が提唱する“Academic surgeon”の精神（図５）を胸に，臨床研究に真摯に向き合っていきたいと思います。

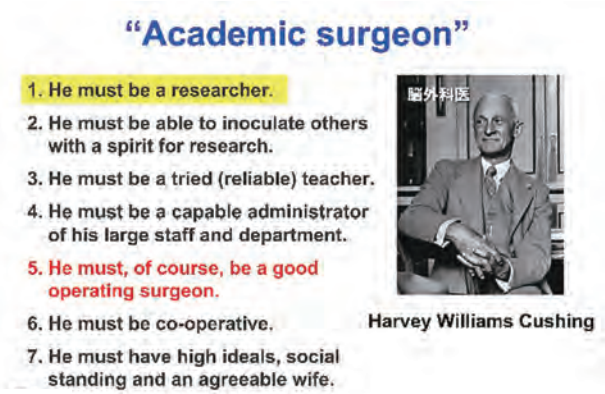


図５

最後に

最後になりますが，HLC 研究テーマをいただきました，島田光生教授，教室の先生方，実験助手の皆様，共同研究の先生方に，この場を借りて厚く御礼申し上げます。

青藍会賞募集

2022年度青藍会賞募集

2022年度青藍会賞を下記のとおり募集します。

本賞は青藍会会員による学術研究の発展と奨励のために，若手研究者の優れた業績に対して授与するものです。奮ってご応募下さい。

1．応　募　資　格

2022年12月末現在で42才未満の青藍会正会員

但し，2022年度までの会費完納入者であること。

2．審　査　対　象

2018年１月から2022年12月までの研究業績を対象とします。

なお，選考では徳島大学で主として行われた研究であることを重視します。

3．応　募　締　切

2023年１月16日（月）（応募締切り後は提出書類の変更を認めません）

4．応　募　手　続

以下の書類を青藍会事務局へ提出して下さい。（**原本とコピー各10部をご用意下さい**）

1．申請書（別紙様式１）
2．履歴書（略歴）（別紙様式２）
3．主指導者の推薦状（別紙様式３）
4．原著論文（2018年１月～2022年12月末に発刊された原著論文；通し番号をつけ，年代の近い順に記載し，主たる論文３編には通し番号に〇をつけること。主たる論文は筆頭著者の論文に限定しない。応募者には下線をひくこと。）（別紙様式４）
5．主たる論文３編の要旨；申請者が論文の研究においてどこに寄与したかの記載を含めること。（各400字程度）（別紙様式５）
6．主たる論文３編の別刷り（コピー可）
7．競争的資金の獲得状況（2018年１月～2022年12月末までに獲得した研究費の名称，研究期間，研究題目，直接経費の研究費総額。研究代表者の資金に限る。）（2022年12月末時点で採択が決定したものも含む）（別紙様式６）
8．今後の研究の展望（800字程度）（別紙様式７）

なお，同一推薦人が複数者を推薦する場合は推薦順位をつけること。

申請書等の各様式は青藍会事務局（seiran@tokushima-u.ac.jp）にご請求下さい。

5．選　　考

青藍会会長から委嘱された選考委員会が行います。

6．受　賞　者　数

原則１名

7．青藍会賞の授与

賞状及び研究助成金100万円の目録を青藍会総会開催日に授与します。

研究助成金は受賞者あてで教室への委任経理金（奨学寄附金）とする。

8．受　賞　講　演

青藍会総会開催日当日，受賞講演を行っていただきます。（30分程度）

お問合せ先　青藍会事務局　TEL 088-633-7109（内線2601）
seiran@tokushima-u.ac.jp

第39回青藍会・医学科講演会を開催

講演会について

青藍会講演会実行委員会委員長
田　中　克　哉（医学部36期）

令和４年10月20日（木）18時30分より藤井節郎記念ホールにて第39回青藍会・医学科講演会が開催されました。講師には東邦大学医学部微生物・感染症学講座教授　舘田一博先生をお招きし，“Covid-19との対峙　―私たちの経験と英知を結集して―”というタイトルでご講演を賜りました。舘田先生は1985年長崎大学医学部をご卒業になり，長崎大学の第二内科に入局されました。1990年に東邦大学医学部微生物学講座に異動され，2011年に同講座教授にご就任されています。2020年２月に設置された新型コロナウイルス感染症対策専門家会議（後に分科会に移行）の構成員であり，厚生労働省新型コロナウイルス感染症対策アドバイザリーボードのメンバーとして現在も大変お忙しく活躍されています。座長は呼吸器･膠原病内科学教授の西岡安彦先生（34期）が務められました。当日は多くの教職員，学生，青藍会会員の皆様が県内外よりご出席いただきました。

ご挨拶　田中克哉委員長

舘田先生は冒頭で徳島大学の学生に選んでもらって大変うれしく思われていることを伝え，学生たちに感染症の面白さを伝え，次のパンデミックが来るという覚悟を持ちその時には君たちが対応しなければならないと熱く語られました。この２年半のCovid-19との戦いで世界では６億人が感染し，約650万人が死亡し，日本では2,000万人が感染し4.5万人が死亡しています。講演の中で先生が最初に診ら

舘田一博先生

れたCovid-19感染患者の胸部CT画像を示されました。両側の肺背側がスリガラス様になり，WBC 6600，CRP 23.7でした。ウイルス感染でここまでの肺炎は珍しく，先生は最初，細菌性肺炎の合併を疑われましたが，実はこれはコロナ感染に特徴的なサイトカインストーム併発であることを説明されました。Covid-19はACE2タンパクに感染し，ACE2は肺胞上皮細胞や全身の血管内皮細胞に存在するので，Covid-19に感染すると血管内皮細胞が障害され全身の臓器に影響を来します。血管内皮細胞に感染するとvWF，VIII因子が増加し血栓ができます。また，Covid-19感染の重症化はサイトカインストームであり，その作用機序として１型インターフェロン（IFN-1）の関与をお示しになり，その詳細なメカニズムをご紹介になりました。

治療薬やワクチンの進歩も目覚ましいものがあります。注目すべき点はそれらが臨床応用されるまでの時間が早いことです。米国ではEUA（Emergency Use Authorization）緊急使用許可という制度があります。日本も厚労省がこの度，緊急承認制度を創設し，塩野義製薬が開発した治療薬の認可がもう少しのところまで来ています。日本はワクチン開発でも大きく出遅れました。2002年SARS，2012年MERSが世界的に流行し，海外の製薬会社はワクチン開発に力を入れていましたが，これらの感染症は日本ではあまり流行せず，日本の製薬会社は消極的でした。そのため2019年のCovid-19にワクチン臨床応用の対応が遅れました。今回政府は3,000億円規模のワクチン開発費を予算処置することが決まり，次のパンデミックに活かしてもらいたいと日本

座長　西岡安彦医学部長

の製薬会社にエールを送られていました。

最後に学生に語りかけるように，“Be prepared”と言われ，今回のようなパンデミックでは世の中が右から左に変わるような大きな影響があり，感染症学はそれに立ち向かう仕事で夢があると語られました。そして，リサーチマインドをもって対応することが大事であることを強調されました。舘田先生がお話になったCovid-19の感染のメカニズム，治療薬の開発，ワクチン開発の実情を知ると医学の力強さを強烈に感じ，リサーチマインドの重要性を改めて感じました。今回，お忙しいなか徳島に足を運んでいただき直接熱いお話を聞けて，職員，学生，青藍会会員にとって非常に有意義な時間を過ごせました。本当にありがとうございました。

舘田一博先生のご講演を拝聴して

田　嶋　　藍（医学科３年）

この度，東邦大学医学部微生物・感染症講座教授としてご活躍されている舘田一博先生をお迎えして，青藍会・医学科講演会にてご講演をいただきました。

舘田一博先生は，微生物・感染症がご専門で，過去には日本感染症学会の理事長を務められました。また，新型コロナウイルス感染症対策専門家会議の構成員でもあり，厚生労働省新型コロナウイルス感染症対策アドバイザリーボードのメンバーとしてご活躍されています。

今回のご講演では，COVID-19の疫学や感染・重症化の機序，治療薬やワクチンなど多岐にわたる内容をとても分かりやすくご説明いただきました。その中でも特に印象に残っていることとして以下の２点をご紹介したいと思います。

１点目は，COVID-19と血栓形成についてです。新型コロナウイルスが肺の血管内皮細胞に感染するとvWFや第Ⅷ因子などが放出され，血栓が形成されるそうです。また，vWFは加齢により増加し，第Ⅷ因子はＯ型以外の血液型の人で多いことが分かっていて，これらが高齢者やＡ型・AB型の人が重症化しやすいことと関連があるそうです。

２点目は，COVID-19とサイトカインストームについてです。COVID-19でみられるサイトカインストームは，通常感染初期に放出されるⅠ型IFNの放出が遅いことが原因と考えられているそうです。また，重症例や死亡例では健常者に比べⅠ型IFNの活性を中和する自己抗体を持つ人の割合が多いこと，Ⅰ型IFN自己抗体は加齢により増加することが分かっているそうです。自己抗体を有するだけでは無症状であるが，ここに新型コロナウイルス感染が加わることで重症化する可能性があり，このことは高齢者で重症化しやすいことと関連があると考えられているそうです。

これまでニュース等で高齢者は重症化しやすく，Ｏ型は重症化しにくいということは知っていましたが，その理由について詳しくご説明いただき，大変勉強になりました。今回の講演で感染症の面白さやリサーチマインドの大切さを学びました。また，舘田先生の学生にも分かりやすいスライドや聴衆を引き込む話し方は，研究室配属の発表会に向けた準備をしている私にとって非常に参考になりました。

最後になりますが，今回の講演会でご尽力いただきました職員の皆様，先生方，青藍会事務局の皆様に深く感謝申し上げます。そして，お忙しいところ大変貴重なご講演をしていただきました舘田一博先生に心よりお礼申し上げます。

講演会風景

青藍会の助成活動

医学科学生に手術着を寄贈

医学科学生に手術着を寄贈の件について

徳島大学大学院医歯薬学研究部脳神経外科学教授
髙　木　康　志

平素より青藍会の皆様には大変お世話になっております。現在，大学病院の手術部長を務めさせていただいております，脳神経外科学の髙木です。先生方もご存じのようにクリニカルクラークシップにおける手術見学は外科系診療科における卒前教育の中で，非常に重要な意味を持ちます。私も振り返ってみると，手術室内での見学で，手術の技術に非常に感動し外科系診療科にすすんだことを思い出します。さて，徳島大学病院手術部において手術着不足は慢性的な問題で特に，クリニカルクラークシップの時期には午前９時を過ぎると手術着がないという状況が度々起こっておりました。そこで，手術部では学生向けの手術着を準備し手術着不足を解消する案を検討しておりましたが，この件について青藍会の皆様にご協力いただけないかと金山博臣副病院長にご相談させていただきました。今回，荒瀬誠治会長をはじめ青藍会の先生方の迅速なご対応により無事，学生用の手術着を準備させていただくことができました。術衣のデザインは藍の色とさせていただき，青藍会寄贈との文字を入れさせていただきました（写真）。

この術衣で勉強してもらい，今後数多くの徳島大学医学部の卒業生が徳島および四国の医療に携わってもらえるように私たちも努めていきたいと思っております。この度はご協力誠に有り難うございました。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

徳島大学病院卒後臨床研修センターへの寄付

徳島大学病院卒後臨床研修センターの活動報告

徳島大学病院卒後臨床研修センター長
岩　田　　貴（医学部36期）

青藍会ならびに会員の先生におかれましては，新型コロナウイルス感染の対応で大変な中，当院の研修医へのご指導ならびに卒後臨床研修センターの活動に対しご協力とご支援を賜り，誠に有難うございます。令和４年度から卒後臨床研修センター長を拝命いたしました医学部36期卒の岩田貴です。前年度に引き続き，新型コロナウイルス感染による様々な制限下にもかかわらず，各研修医が研修終了要件を満たすために，多くの協力病院や施設のご理解とご配慮のお陰で，それぞれの臨床研修プログラムにおいて，臨床医として必要な知識，技能，態度の研鑽を積ませていただいております。お世話になりました多くの先生方にはこの場をお借りしまして，感謝と共に厚く御礼を申し上げます。この４月から，14名が徳島大学病院の４つの臨床研修プログラムで医師としての第一歩を踏み出しました。

今年度は，阿波踊り期間を挟んで新型コロナウイルス新規感染者数が急拡大し，１日に3,000人を超える新規感染者数をピークに県下でも感染爆発が起こり，いわゆる第７波の到来が起こり，感染者の全数把握のために徳島県庁入院調整課では，急増した仕事量に対して圧倒的なマンパワー不足に陥りました。急拡大する新規感染症に伴う不測の事態に直面した時の医療だけでなく，患者さんを取り巻く社会環境の変化に対する現状把握と対処について，県庁医療政策課の要請を受けて県庁入院調整課に研修２年目，１年目の医師を派遣し，実際に電話対応をして入院調整業務を行いました。参加した研修医は診療現場とは違った雰囲気で，マンパワー不足の緊急事態の中で新規感染者のケアをしつつ，必要な情報を聴取する作業を通して，患者さんから直接聞き取り調査をすることで，より深く患者さんの個々の事情を詳細に把握して患者さんの気持ちに寄り添いながら対応するという，平時の一般外来以上の経験をして非常にインスパイアされたようです。

例年，徳島県臨床研修連絡協議会が主導し行っていた指導医講習会も令和２年度は中止，令和３年度は４会場をオンラインでつないだ方式で開催しましたが，特に人事異動の多い大学病院の指導医の育成と確保が不十分なため，今年度は７月と11月の２回開催とし，県医療政策課の阿佐様や当センターの西副センター長が中心となり，徳島県医師会や各研修病院の事務方のご協力のもと，感染対策のためにE-ラーニングで事前学習ののちに完全オンラインで７月に指導医講習会を行いました。新しい試みでありましたが，今後も活用できる方法であり，収穫もありました。

研修医の確保のためには学生への広報と学生とのつながりを醸成することの重要性を，昨今の学生の病院実習の中止や，対面講義が行えないなど学生との接点が減ったことを通して痛感しておりますので，卒前の臨床実習から卒後臨床研修，専門医研修へと連続性を持たせた魅力的な研修プログラムを構築し，大学病院ならではの特徴とメリットのある救急の研修や病院見学の学生への支援体制などを県内外の学生にアピールし，研修医の確保に努める所存です。

今後とも皆様方には卒後臨床研修に対するご理解と共にご指導・ご支援を賜りますよう，何卒宜しくお願い申し上げます。

入院調整係での電話応対（徳島県庁入院調整課）

徳島大学病院から研修医15名（のべ），医師７名が31日間参加し，新型コロナ陽性患者に電話対応をした。

徳島大学の動き

徳島大学大学院医歯薬学研究部新任教授紹介

徳島大学大学院医歯薬学研究部
小児科学分野教授
漆　原　真　樹（うるしはら　まき）
昭和46年１月12日生

略　　歴

平成７年３月	徳島大学医学部卒業
平成７年４月	徳島大学医学部附属病院小児科医員
平成８年４月	ひのみね整肢医療センター小児科医師
平成９年４月	国立療養所香川小児病院小児科非常勤嘱託医
平成10年４月	国立高知病院小児科非常勤嘱託医
平成11年４月	徳島大学医学部附属病院小児科医員
平成14年４月	徳島赤十字病院小児科医師
平成17年４月	徳島大学大学院ヘルスバイオセンター小児医学分野助教
平成19年７月	四国中央病院小児科医師
平成20年１月	米国 Tulane 大学 Health Sciences Center 生理学教室 visiting assistant professor
平成22年９月	徳島大学病院小児科助教
平成24年４月	徳島大学病院小児科講師
令和４年４月	徳島大学医歯薬学研究部小児科学教授 （現在に至る）

就任のご挨拶

徳島大学大学院医歯薬学研究部小児科学分野
教授　漆　原　真　樹（医学部41期）

令和４年４月１日付で徳島大学大学院医歯薬学研究部小児科学分野の教授を拝命しました。青藍会の諸先生に謹んでご挨拶を申し上げます。

私は平成７年に徳島大学医学部を卒業し，徳島大学小児科学教室に入局しました。四国内の関連病院で小児科専門医研修を行い，小児腎臓病をサブスペシャリティとして本学の大学院に進学し博士課程を修了しております。平成20年からは米国Tulane大学に腎病態における局所レニン・アンジオテンシン系活性化機序に関する研究のため留学し，帰国後は徳島大学小児科で診療・研究・教育に従事しております。自分を育ててくれた徳島県，徳島大学に心から感謝いたします。

徳島大学小児科は腎臓，循環器，新生児，血液腫瘍，アレルギー，神経，内分泌代謝，それぞれの専門分野があり地域の小児医療に貢献し，最先端の研究，医学教育に努めています。今後も関連病院との連携を強め地域医療のさらなる発展と次世代の人材育成を進めていきます。今後も青藍会の諸先輩のご指導，ご鞭撻をどうぞよろしくお願い申し上げます。

徳島大学大学院医歯薬学研究部
耳鼻咽喉科学分野教授
北　村　嘉　章（きたむら　よしあき）
昭和47年12月12日生

略　　歴

平成９年３月	徳島大学医学部医学科卒業
平成９年６月	徳島大学医学部附属病院耳鼻咽喉科医員
平成10年７月	小松島赤十字病院耳鼻咽喉科医師
平成16年３月	徳島大学大学院医学研究科博士課程修了
平成16年６月	徳島大学医学部附属病院耳鼻咽喉科助手
平成17年５月	JA 高知病院耳鼻咽喉科医長
平成19年10月	米国 National Institute of Health, Visiting Fellow
平成21年５月	徳島大学病院耳鼻咽喉科助教
平成22年４月	徳島大学病院耳鼻咽喉科講師
令和２年４月	徳島大学大学院医歯薬学研究部耳鼻咽喉科学分野准教授
令和４年９月	徳島大学大学院医歯薬学研究部耳鼻咽喉科学分野教授 （現在に至る）

就任のご挨拶

徳島大学大学院医歯薬学研究部耳鼻咽喉科学分野
教授　北　村　嘉　章（医学部43期）

令和４年９月１日付けで武田憲昭前教授の後任として，徳島大学大学院医歯薬学研究部耳鼻咽喉科学分野教授を拝命いたしました。青藍会の先生方に謹んでご挨拶申し上げます。

私は平成９年に徳島大学を卒業後，耳鼻咽喉科学教室に入局し，徳島大学および関連施設で研鑽を積んでまいりました。鼻科学と頭頸部腫瘍学を専門としており，研究面では特にアレルギー性鼻炎の病態解明と新規治療法の開発を行っています。またアレルギー疾患医療拠点病院である徳島大学病院の総合アレルギーセンター長として，徳島県のアレルギー診療レベルの向上と一般市民への啓発に取り組んでいます。

今後は，基礎および臨床研究を発展させ，ロボット手術などの世界標準治療を提供し，次世代の研究者と指導者を育成して，徳島大学の発展に貢献できるよう全力で邁進する所存です。これまで育てていただきました青藍会の先生方に心より感謝申し上げるとともに，今後も引き続きご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。青藍会の益々のご発展を祈念し，就任のご挨拶とさせていただきます。

徳島大学大学院医歯薬学研究部
地域呼吸器・血液・代謝内科学分野特任教授
埴　淵　昌　毅（はにぶち　まさき）
昭和43年４月８日生

略　　歴

平成５年５月	徳島大学医学部附属病院第三内科医員（研修医）
平成11年４月	国立療養所刀根山病院呼吸器内科
平成13年８月	徳島大学医学部第三内科助手
平成15年７月	徳島大学医学部附属病院第三内科講師
平成17年10月	徳島赤十字病院呼吸器科副部長
平成19年１月	徳島大学病院呼吸器・膠原病内科講師
平成21年５月	M.D. Anderson Cancer Center, Visiting Associate Professor
平成23年３月	徳島大学病院呼吸器・膠原病内科講師
平成24年２月	徳島大学大学院 HBS 研究部呼吸器・膠原病内科学分野准教授
平成27年４月	徳島大学大学院医歯薬学研究部呼吸器・膠原病内科学分野准教授
平成29年４月	公立学校共済組合四国中央病院第二内科部長・臨床研究センター長
平成31年４月	公立学校共済組合四国中央病院呼吸器内科部長・臨床研究センター長
令和４年４月	徳島大学大学院医歯薬学研究部地域呼吸器・血液・代謝内科学分野特任教授（現在に至る）

特任教授就任のご挨拶

徳島大学大学院医歯薬学研究部地域呼吸器・血液・代謝内科学分野
特任教授　埴　淵　昌　毅（医学部39期）

令和４年４月１日付けで徳島大学大学院医歯薬学研究部地域呼吸器・血液・代謝内科学分野の特任教授を拝命いたしました。この場をお借りいたしまして青藍会会員の先生方に，謹んでご挨拶申し上げます。

私は平成５年に徳島大学を卒業後，当時の第三内科に入局し，徳島大学および関連医療機関にて勤務してきました。専門分野は呼吸器悪性腫瘍ですが，呼吸器疾患全般の診療・研究・教育に取り組んでおります。今回，徳島大学および本寄附講座の設置元である高松市立みんなの病院に赴任させていただくこととなりました。

微力ではございますが，徳島大学（呼吸器・膠原病内科学分野，血液・内分泌代謝内科学分野）と連携して診療活動を行うとともに，高松市地域において医学生・研修医および専門的診療能力を有する医師の育成を行い，呼吸器疾患や内分泌・代謝疾患の病態解明および治療に関する研究に尽力してまいる所存であります。今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますよう，よろしくお願い申し上げます。最後に，青藍会の益々のご発展をお祈り申し上げ，就任のご挨拶とさせていただきます。

徳島大学病院新任教授紹介

徳島大学病院リハビリテーション部教授
松　浦　哲　也（まつうら　てつや）
昭和43年９月５日生

略　　歴

平成５年３月	徳島大学医学部医学科卒業
平成５年４月	徳島大学大学院医学研究科入学
平成９年３月	徳島大学大学院医学研究科単位取得退学
平成９年４月	高知赤十字病院医員（整形外科）
平成11年６月	徳島大学医学部附属病院医員（整形外科）
平成14年３月	徳島大学大学院医学研究科博士課程修了
平成14年11月	徳島大学医学部附属病院助手（理学療法部）
平成15年９月	米国ピッツバーグ大学整形外科リサーチフェロー
平成17年９月	徳島大学医学部附属病院助手（理学療法部）
平成20年５月	徳島大学病院整形外科講師
平成26年７月	徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 （現：医歯薬学研究部）准教授（運動機能外科学）
平成28年10月	徳島大学大学院医歯薬学研究部脊椎関節機能再建外科学特任教授
令和４年４月	徳島大学病院リハビリテーション部教授 （現在に至る）

就任のご挨拶

徳島大学病院リハビリテーション部
教授　松　浦　哲　也（医学部39期）

令和４年４月１日付けで徳島大学病院リハビリテーション部の教授を拝命いたしました。

私は平成５年に本学を卒業後，整形外科に入局するとともに大学院に進学しました。大学院卒業後は２年間，高知赤十字病院で研修した後に帰局し，スポーツ医学で有名な米国ピッツバーグ大学に留学する機会を得ました。帰学後はスポーツ傷害を中心に診療・研究・教育に従事してきました。スポーツ傷害の治療はリハビリテーションを中心とする保存療法が大半で，手術例でも術前後のリハビリテーションが治療成績を左右します。したがって運動器リハビリテーションの研鑽に努めてまいりました。

今後は運動器リハビリテーションの経験を活かし，脳血管，呼吸器，心大血管やがんなどのリハビリテーションにも積極的に関与していきます。運動器以外の疾患でも廃用による活動性低下を併存しており，運動器に働きかけるリハビリテーションの重要性が増しています。超高齢社会ではさらにその傾向が強く，徳島大学病院のみならず関連施設との連携も強化していく所存です。

末筆になりましたが，青藍会の益々のご発展をお祈り申し上げ，就任のご挨拶とさせていただきます。

徳島大学病院地域産婦人科診療部特任教授
加　藤　剛　志（かとう　たけし）
昭和46年４月28日生

略　　歴

平成８年３月	徳島大学医学部医学科卒業
平成８年５月	徳島大学医学部附属病院医員（研修医）
平成９年４月	徳島大学大学院医学研究科博士課程入学
平成13年３月	徳島大学大学院医学研究科博士課程修了
平成13年４月	愛媛県立中央病院産婦人科
平成15年４月	国立南和歌山病院産婦人科医員
平成18年９月	社会保険紀南病院産婦人科医長
平成21年４月	徳島大学大学院産科婦人科学分野助教
平成22年４月	徳島大学大学院産科婦人科学分野講師
平成23年４月	医療法人誠仁會伊藤病院副院長
平成24年４月	徳島大学大学院産科婦人科学分野助教
平成29年４月	徳島大学大学院産科婦人科学分野講師
令和４年４月	徳島大学病院地域産婦人科診療部特任教授 （現在に至る）

就任のご挨拶

徳島大学病院地域産婦人科診療部
特任教授　加　藤　剛　志（医学部42期）

このたび，令和４年４月１日付けで，徳島大学病院地域産婦人科診療部特任教授を拝命いたしました。青藍会の先生方に，謹んでご挨拶申し上げます。

私は平成８年に徳島大学医学部医学科を卒業し，徳島大学産科婦人科学教室に入局しました。平成13年に徳島大学大学院医学研究科博士課程を修了した後は，関連病院で研鑽を積んでまいりました。この間に腹腔鏡下手術に興味を持つようになり，臨床におけるライフワークとなりました。その後，徳島大学で婦人科腫瘍学，女性医学に関する診療と研究に従事しつつ，腹腔鏡下手術の実施と教育を中心に担当し，最近ではロボット支援下手術に携わっています。関連病院への手術支援にも積極的に出向き，人材育成に取り組んでまいりました。大小様々な病院での勤務経験を活かしつつ，引き続き徳島大学と地域医療の継続的な発展に貢献できるよう努力してまいりますので，今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

準会員だより　特別編　学生広報委員企画

本編は，今回初めて学生広報委員に就任した福本和生君と倉良詩夢さんに企画・作成していただきました。

アフターコロナの学生の取り組み総集編

福　本　和　生（医学科６年）
倉　良　詩　夢（医学科６年）

コロナ禍の学生生活を記す意義

学生広報委員
福　本　和　生（医学科６年）

この度青藍会100号記念に学生代表として企画を任せていただきました，医学科６年の福本和生と申します。この100号という節目に，社会の節目ともなったコロナ禍の徳島大学での出来事と学生の思いを記録することができ光栄です。

ここではコロナ禍での学生の思いを記す意義について２つ稚拙ですが考えをあげておきます。最後までお付き合いくだされば幸いです。

まず，世界がこれだけ大きく動いた時に徳島でなされた対応が正しかったのかどうか，判断する材料になると思いました。この数年の対処法は時の審判を経て100年後の青藍会学生委員にその是非が委ねられる事になると思います。現在渦中にいる私たちにとっては当たり前の風景となりましたが，実際ここ数年の間に徳島大学でたくさんの事・物・人が変化しました。刹那的に良い変化も悪い変化もあったかもしれませんが今後これを見る方の役に立てばいいなと思います。

２つ目はコロナというテーマは学生の意見を反映しやすいということです。ここまで老若男女が同じテーマをそれぞれの立場で自由に述べられ，その意見が尊重される機会はありません。その時，徳島の学生は何を考え，何をしていたのか，ぜひ卒業生の先輩方にも知っていただけたらと思います。注目は蔵本祭・西医体の存続です。積み上げられてきた歴史の重みを実感するとともに新しい文化を導入せざるを得ない葛藤を今の代表との対談を通して伝えます。

既に卒業された先輩方はもちろん在校生にも楽しんでもらえたらと思います。

R.I.P 西医体 新型コロナに何思う

サッカー部主将
中　井　洸　我（医学科４年）

皆様はじめまして。2021.07から2022.08まで医学部サッカー部主将を務めた中井洸我と申します。

まずは，このような素晴らしい青藍会会誌を永く続けてこられた関係者の皆様に感謝申し上げます。此の度は，学生と徳島大学のOB・OGの皆様とをつなぐ冊子にしたいという想いを受け，部活動生を代表して西医体の中止についての正直な想いを書かせて頂きます。

様々なご意見があると思いますが，私は西医体の開催準備だけでも価値があったと思っています。本来学生だけで部活動をマネジメントすることは容易ではなく，感染拡大に伴う部活動制限の影響で縦の繋がりの希薄化や目標の喪失によるモチベーションの低下など課題が多くありました。しかし，西医体の開催が決まったことでチームの一体感が高まり，１人ひとりがチームのために何をすべきか考えるようになりました。西医体の存在自体が個々の取り組む姿勢に良い影響を与えたと感じています。とはいえ，私自身は17年のサッカー人生の中で最も楽しみにしていた西医体を迎えることができず非常に残念です。今でも西医体のピッチに立ってサッカーをしている光景を夢にみて辛くなることがあります。

これからも新型コロナウイルスの影響を部活動・サークルが受けることは間違いありません。ただ，どの組織でも限られた資源の中で試行錯誤しながら必死に取り組んでおりますので，引き続き，皆様のご支援ご指導のほど宜しくお願いします。

（2022年の蔵本祭運営を任されることになったお２人に内情を伺いました。）

コロナ禍での蔵本祭への取り組み

蔵本祭実行委員長・サッカー部
中　井　洸　我（医学科４年）

ステージ実行委員長・ゴルフ部
家　氏　敬　人（医学科４年）

１．コロナ禍での蔵本祭開催に向けての学生側の葛藤や取り組みについて教えてください。

中井：蔵本祭の開催目的は，３つあります。１つ目は蔵本生が活躍できる場を作ること。２つ目は学部学科間の交流を生み出すこと。３つ目は歴史ある蔵本祭を継承することです。僕たちは１年生の時に蔵本祭を経験していますが，それ以降は蔵本祭が開催されてません。雰囲気だけでも知っている僕たちが実践する必要があると思い今年の開催に踏み切りました。文化の継承といえども，既存の文化祭の進め方を誰も知らないために，判断を迫られる回数が例年より増えてなかなかに大変です(笑)。一方でそういった環境のおかげで，これまでのアタリマエを見直し，新しいチャレンジも増えました。例えば，運動会や，企業と協力して，大学内をLEDやプロジェクションマッピングで装飾しようという学内装飾が初の試みです。

家氏：僕はステージ実行委員長なので，基本的にはステージの内容を決めたり，設営や司会を行ったりとか，ステージに関わることを大体やってます。コロナによる制限は，例えばですけど，模擬店って例年部活動が食べ物屋とかやってたじゃないですか。あれできないんですよ。食べ物とか絶対ダメって言われてて…。早食いとかも含めて食べ物系は全部ダメで。新しい方向で色々考えていかなあかんです。模擬店がないとステージもなかなか集まらないかなと思うので，今年だけでも模擬店の内容を変えていかないといけないんです。僕ゴルフ部なんですけど，後輩に聞いてみると，例年はうどんを売っていたのですが，今年はパターマットで２球連続で入ったら商品ゲットみたいな風にしようとしているそうです。これめっちゃいい案だなと思っていて。こんな風に形を変えつつも前のように楽しめればいいかなと思っています。

２．蔵本祭や普段の学校生活に関して，学校側に求めることって何かありますか？

中井：蔵本祭に関しては医歯薬の学友会や後援会，自治会から資金を頂いていて開催しています。予算がないと動くこともできないので，ある程度学生に自由を任せて頂けている点において，感謝しかないです。また，こういう状況でも学務の方々も協力してくださるので，不平不満とかは何も出てこないんですよ。

福本：特に要求とかもないですか？

中井：学部間交流ができる機会があればなと思います。蔵本祭で作ろうとしてるんですけど，将来チーム医療をやっていくんだから，お互いの職業について学んだり，学部間の合同授業を行ったり，というのは普段からもっと増やしてほしいです。

家氏：僕聖人で，生まれてこのかた不平不満を言ったことは一度もないんですけども…

一同：笑い

家氏：その僕があえていうとすれば，中井くんが言ったように，蔵本キャンパスってせっかく医歯薬合同なのにお互い何してるか全然知らないんですよね。部活やサークルに入ってない限り学部間交流が一切ない。僕，検査技師の先輩がいるんですけど，「僕検査技師の仕事内容とか全然知らないから普段どんな感じなのか教えてください」って色々教えてもらったこともあります。お互いのことを何も知らないのは悲しいなと思いました。

３．今年が文化祭の分水嶺とすると，残したい伝統，新しく作りたい伝統はありますか？

中井：残したいのは飲み会などの縦の繋がりですかね。作りたいのは横の繋がりです。

家氏：同意です。高校の頃1,200人カラオケを体育館で企画しました。イベントの最後に学年関係なく盛り上がっているのを見てこんなのを蔵本祭でもできたら誇らしいと思いました。

対談の様子（2022年９月７日撮影）

倉良：アフターコロナ世代に向けて一言！
中井：オンライン授業最高やぞー！
中井：冗談はさておき，オンラインの加速によって，情報がすぐに得られて，全国に学生の輪も広がりました。その一方で，今いる徳島にも目を向けてほしいなと思います。徳島は関係性を深めやすいので，オンラインで徳島以外の世界を知りつつリアルの交流も深めてほしいです。
家氏：校長の話か！
家氏：でもええこと言うなぁ。僕最初に思いついたのが，アフターコロナでもお酒飲もうぜってこと。もう10個上と飲みの文化が全く違うんですよね。なので注意喚起してやります。
家氏：うっすいメッセージでした。
福本：注意して飲みます！笑
倉良：２人共ありがとうございました。
中井：このオンライン対談もいいですよね。充電やばいですけど，あもう１分で切れます。
倉良：それは急がないと，じゃあ対談写真撮りますね！はいチーズ！

（地域との関わりもこのコロナ禍で大きく変化しました。地域医療の現場や総合診療を学ぶ活動がどう制限されどのように回避したのか，同じ医学科６年でT-CoM地域医療研究会元部長の多田里穂さんに聞いてみました。）

コロナ禍と地域医療研究会

多　田　里　穂（医学科６年）

私たちT-CoM地域医療研究会は，「徳島県内の地域医療を学ぶこと」を目標に，活動しています。まずは，私たちの活動が新型コロナウイルス流行前後でどれほど大きく変わったかをお伝えします。

感染流行前には，地域医療の現場を実際に見学，総合診療に関する勉強会，加えて阿波踊りなどの活動を行っていました。感染が始まってからは，できることが大幅に制限され，サークルの売りである「実際の地域医療の現場を知ることができる」活動が不可能になりました。そこで，「将来，地域医療など診療現場で役立つ知識を学ぶことができる」活動を強化することにしました。それは，zoomを利用したオンライン勉強会です。総合診療科の先生方にご助言を頂きながら，新型コロナウイルス，災害医療など学生が学びたいことをテーマに，１年生から６年生まで誰もが参加できる会を行っています。

活動の変更を余儀なくされましたが，勉強会は参加部員から好評を得ています。しかし，実地の活動が制限されたことで，新入部員の数が大きく減少してしまいました。「厳しい冬の時代を乗り越えてこそ，組織は強くなる」という顧問の谷先生の言葉を胸に，新しい活動を日々模索しています。

第12回SAKURA-GMカンファレンス
（2020年12月28日Zoom開催）

（コロナ禍のオンライン授業を期に学外で活躍する学生が増えました。徳島大学医学部医学科３年竹原優さんに活動について聞いてみました。）

祝！令和 広がる医師のキャリアパス

竹　原　　優（医学科３年）

初めまして。青藍会100号に寄稿させていただけること，心から嬉しく思います。今回はコロナ禍の変化について私自身の経験を書かせていただけたらと思います。

この２年間リアルの制限が厳しくなるにつれ逆に繋がりの輪が広がりました。そして「医学部に入って医者になる」以外の方々と多く関わる中で，自分は将来何をしたいのか，どんな社会を作りたいかをより真剣に考えるようになりました。

私には創作活動を通じて１人では乗り越えようもない辛い過去を乗り越えた経験があります。その経験からアートにのめり込むようになり，医学部で学びながらクリエイターとして，阿波市，吉野川市を皮切りに全国で作品を使用してもらえるようになりました。今は人間の本能に訴え，感情を揺らすことのできるアートと医療を掛け合わせたいと，大学で高齢者の認知機能とホスピタルアートに関する研究に携わらせてもらっています。定量化が難しいアートをどう科学するかが非常に難しく，同時に楽しく，毎日健康的に頭を走らせています。

マスキングテープアーティストの西村さんと徳島大学ホスピタルアートクラブのコラボワークショップにて（2022年５月１日撮影）

まだまだ３年生ということで将来の明確な医師像は僕自身にもまだ掴めていません。しかし，このコロナ禍で内に籠るだけが勉強でないことがわかりました。学生という人生で最も自由な時間に「よく学びよく学べ」を真の意味で実践し，誰かの役に立てるような存在になれればと思います。

学生広報委員 編集後記

倉　良　詩　夢（医学科６年）

福本さんと一緒に，この度青藍会学生広報委員を務めさせて頂きました，医学科６年の倉良詩夢と申します。今回の学生企画を通して改めてコロナ禍という非日常性を認識しました。私どもは，遠隔授業，制限つきの病院実習，オンラインでの就職活動等を経験しておりましたが，運動部やサークル，蔵本祭実行委員の幹部の方々，学外での活動に力を入れられている方にお話を伺うと，またそれぞれ違った立場で，様々な葛藤があったのだと知りました。そして，感染症対策を講じながら活動を続けられるよう，日々解決策を模索し続けられていた姿勢と情熱に，大変心打たれました。

末筆ながら，今回のインタビューや対談，原稿依頼にご協力頂きました学生の皆様，ご指導ご鞭撻頂きました青藍会の先生方，お忙しい中本当にありがとうございました。100号という記念すべき節目に，このような機会を賜りましてとても光栄に思います。これからも末永く，青藍会が益々盛り上がっていきますことを心からお祈りしております。

青藍会広報委員会オンライン会議の様子（2022年５月23日）

青藍会の動き

教授就任のご挨拶

徳島文理大学保健福祉学部看護学科教授
楊　河　宏　章（やながわ　ひろあき）

略　　歴

昭和61年３月	徳島大学医学部医学科卒業
昭和61年５月	徳島大学医学部附属病院第三内科医員（研修医）
平成３年７月	徳島県立中央病院内科医師
平成６年４月	徳島大学医学部附属病院第三内科助手
平成11年10月	英国 Imperial College, National Heart and Lung Institute 研究員
平成13年４月	徳島大学医学部附属病院第三内科講師
平成15年６月	徳島大学医学部附属病院臨床試験管理センター助教授 徳島大学医学部附属病院臨床試験管理センター副センター長
平成21年２月	徳島大学医学部・歯学部附属病院病院教授（称号付与）
平成22年４月	徳島大学病院臨床試験管理センターセンター長
令和２年４月	徳島大学病院総合臨床研究センターセンター長（名称変更）
令和４年４月	徳島文理大学保健福祉学部看護学科教授 （現在に至る）

就任のご挨拶

徳島文理大学保健福祉学部看護学科
教授　楊　河　宏　章（医学部32期）

令和４年４月から徳島文理大学保健福祉学部看護学科に勤務することになりました。謹んでご挨拶を申し上げます。

私は昭和61年に徳島大学医学部を卒業し，内科学第三講座（現:呼吸器･膠原病内科学分野）に入局しました。呼吸器疾患の臨床研究に従事したのち，平成15年から，徳島大学病院総合臨床研究センターにおいて，医薬品開発，研究に関して体制整備の面から取り組んできました。そのなかで医師以外の職種の方々と協働する貴重な経験を得，現職は，看護職の学士教育が主たる業務です。

いささか経歴は一般的ではないのですが，多様性がますます重要になる昨今，医師の在り方も多様になることでその世界も広がっていく気がします。特に若手の先生方には，私よりはるかに柔らかい頭を生かして，医師を基本にいろいろな挑戦をやってみられるとよいのではないかと思い，エールを送る意味でご挨拶させていただいた次第です。

医師会に入会の際も，医療機関勤務でないので自宅会員になる立場ですが，幸い診療に関わる機会もいただいています。今後とも御指導・御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。
青藍会の先生方のますますのご発展をお祈り申し上げます。

福井大学医学部病態解析医学講座放射線医学教授
辻　川　哲　也（つじかわ　てつや）
昭和49年11月25日生

略　　歴

平成11年３月	徳島大学医学部医学科卒業
平成11年６月	徳島大学医学部附属病院放射線科研修医
平成12年４月	高松赤十字病院放射線科
平成13年４月	屋島総合病院放射線科
平成14年４月	愛媛県立中央病院放射線科
平成15年４月	徳島赤十字病院放射線科
平成16年４月	徳島大学医学部放射線科助手
平成18年４月	福井大学高エネルギー医学研究センター助手
平成21年６月	福井大学医学部放射線科助教
平成22年10月	米国国立精神衛生研究所ポスドクフェロー
平成25年４月	福井大学高エネルギー医学研究センター准教授
令和４年４月	福井大学医学部教授病態解析医学講座放射線医学（現在に至る）

就任のご挨拶

福井大学医学部病態解析医学講座放射線医学野
教授　辻　川　哲　也（医学部45期）

令和４年４月１日付けで福井大学医学部病態解析医学講座放射線医学の教授を拝命致しました。青藍会の先生方に謹んでご挨拶を申し上げます。

私は平成11年に徳島大学医学部を卒業し，徳島大学医学部放射線医学教室（西谷弘教授（当時））に入局しました。四国の関連病院にて放射線画像診断を中心に研鑽をつみ，平成16年から徳島大学医学部放射線科助手として臨床・研究・教育に従事しました。そのころ PET 分子イメージングに感銘をうけ，国内でそれを牽引していた福井大学高エネルギー医学研究センターに平成18年に異動し，主に腫瘍 PET 分子イメージングの臨床研究に従事しました。その後米国国立精神衛生研究所に留学し，平成25年に帰国後は統合型 PET/MRI 装置と各種 PET 薬剤を用いた臨床研究を行って参りました。私が放射線科医として働き始めた23年前から心の中で持ち続けていた，薬剤と装置の進歩による「分子・機能・形態イメージングの融合」という理想形が現在の臨床レベルでほぼ実現しています。災害・感染症・紛争などが多発する現在の物憂げな世情においても，出来る限り光明を求め，今後は未来を創っていく若者達を応援し活気のある医局作りに励みたいと考えております。

最後に，青藍会の益々のご発展をお祈り申し上げ，着任の御挨拶とさせていただきます。

香川大学医学部整形外科学講座教授
石　川　正　和（いしかわ　まさかず）
昭和48年12月17日生

略　　歴

平成10年３月	徳島大学医学部医学科卒業
平成10年６月	島根医科大学医学部附属病院医員（研修医）
平成15年４月	神戸市地域結集型共同研究事業特別研究員
平成17年４月	国立大学法人広島大学非常勤職員 COE 研究員
平成20年８月	広島大学病院病院助教
平成21年１月	米　国 Cardiovascular Research Institute, Case Western Reserve University (Cleveland, OH) Senior research associate
平成25年５月	広島大学病院病院助教
平成27年４月	広島大学大学院助教
平成31年４月	広島大学大学院医系科学研究科人工関節・生体材料学寄附講座准教授
令和４年９月	香川大学医学部整形外科学講座教授 （現在に至る）

教授就任のご挨拶

香川大学医学部整形外科学講座
教授　石　川　正　和（医学部44期）

令和４年９月１日に香川大学医学部整形外科学講座の４代目教授を拝命しました医学部44期生の石川正和です。青藍会の先生方に謹んでご挨拶申し上げます。

私は，平成10年に徳島大学を卒業後，膝関節外科医を目指し，越智光夫先生が主宰する島根医科大学整形外科学教室に入局しました。大学院４年目に神戸の理化学研究所，先端医療センターの研究員として血管内皮前駆細胞の研究に携わりました。平成16年からは越智先生が主宰する広島大学整形外科学教室に入局し，平成21年１月からはオハイオ州クリーブランドの Case Western Reserve University で約４年間悪戦苦闘しました。平成25年には広島大学整形外科学教室に帰局，平成28年１月からは現教授の安達伸生先生と広島大学整形外科学教室の運営に関わり，平成31年からは広島大学人工関節・生体材料学講座の寄附講座准教授として膝関節外科を中心に研鑽を積んでまいりました。

今後は，“謙虚”で，“患者さんの声”に耳を傾け，“愛”ある整形外科医師像を掲げ，Surgeon-Scientist の育成を目指し，四国の医療に貢献していきたいと存じます。

末筆ではございますが，青藍会の益々のご発展を心より祈念致します。今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

病院長就任のご挨拶

病院長就任にあたって

徳島県立三好病院長
藤　永　裕　之（医学部36期）

住友正幸前院長の後任として令和４年４月１日に徳島県立三好病院長を拝命しました藤永裕之です。就任にあたり青藍会の皆様にご挨拶させていただきます。

私は平成２年に当時の第二内科伊東進教授のもとに入局し，主に循環器内科を中心に大学病院と関連病院で診療や研究に従事後，平成13年に徳島県立中央病院に赴任させていただいております。循環器診療に加え教育にも携わらせていただき，令和３年10月に当院に救急・教育担当の副院長として赴任させていただき４月より院長に就任させていただいております。就任後新型コロナウイルス感染症の院内発症にて救急診療等の診療業務に対して青藍会の皆様には大変ご心配とご迷惑をおかけしたことお詫び申し上げます。

前院長の方針を引き継ぎ「誠実で信頼される病院」の理念のもと，引き続き新興感染症の診療を行い，救急医療や高齢者医療の充実をさらに図り，地域医療をしっかり支えることができる病院を目指して参ります。また新外来棟の建築も予定されております。さらに地域医療を支える人材育成を行い，地域の要となれるよう努力させていただきたいと存じます。青藍会の皆様におかれましては今後とも引き続きご指導およびご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

投稿規定

広 報 委 員 会

○ 原稿について

●必ず，文頭にタイトル，氏名・卒業期をご記載ください。
　例　タイトル ○ ○ ○ ○ ○ ○　　山　田　太　郎（医学部○期）

●**文字数は1,400字以内，写真は１枚でお願いいたします。**
なお，写真には見出しあるいは説明文を必ずつけてください。

●英数字は半角文字で，カタカナは全角文字で入力してください。

●原稿の文中に登場する氏名及び敬称については，スペースを入れずに記載してください。
（例　山田太郎君　　高倉健さん　　松下幸之助先生）

○ 原稿及び写真の送付について（青藍会事務局 seiran@tokushima-u.ac.jp）

●原稿送付は，可能な限りメール添付または電子媒体にてお送りください。
プリントされた写真については，郵送にてお送りください。後日，返送いたします。

●画像ファイルを送付される場合は，**原稿とは別に，JPEG ファイル等でお送りください。**
原稿（Word 等）に貼り付けますと，画質が悪くなります。
なお，画像ファイルの容量が大き過ぎますと届かないことがございます。容量を小さくして１枚ずつに分けてお送りください。また，**青藍会事務局からの連絡がなかった場合は，届いていないことが考えられますので，再度確認のご連絡をお願いいたします。**

○ 原稿の締め切り日を厳守願います（次号101号の締め切り日は令和５年３月31日（金）です）

会報の印刷および製本には，原稿をお預かりした後，ゲラ刷り作成，校正，修正，編集会議等で２ヶ月ほどの時間を必要といたします。
締め切り日より遅れた場合は，次号の掲載になりますので予めご了承ください。

○ 編集作業について

●お送りいただきました原稿は語句などに関して広報委員会で校閲させていただきます。その結果，修正をお願いする場合もございますことをご了承おきください。

●用語や表記などの統一のために文章に手を入れることがございます。予めご了承ください。

○ 原稿校正について

●広報委員会で会報全頁のレイアウト等を校正後，製本前のゲラ刷りを作成しお送りさせていただきますので，著者校正をお願いいたします。

●**校正時の大幅な追記，削除等は，会報発行期日に影響いたしますので，ご遠慮くださいますようよろしくお願い申し上げます。**

編　集　後　記

私事ですが平成28年度から広報委員会に入れていただき，平成29年の第89号青藍会会報からは広報委員会委員長として編集に携わってきました。その時から100号会報をどのようにするか考えておりましたが，あっという間に５年が過ぎ，記念すべき100号が多くに先生方に支えられて発行されることになりました。100号記念特別企画として座談会を行い，卒業生・支部・学生の皆様からは100号に向けたメッセージをいただき，さらに青藍会のあゆみとして，1952年の準備委員会発足からの歴史をまとめていますのでご一読下さい。

令和３年から学生委員として倉良さんと福本くんに編集委員会へ参加してもらっています。二人には100号記念特別企画の座談会に参加していただき，準会員だより特別編としてコロナ禍での学生生活についての記事を企画していただきました。卒業生の先生方とは違った学生の視点からの文章に若さや新鮮さを感じます。

さて，この機会に最近の会報と以前のものを手にとって比べてみました。コロナ禍の前は，学生のクラブ活動における優勝などの成績が大きく掲載され，また学生や会員の海外留学記が数多く見られます。そして写真の多くは宴会や飲み会での楽しそうな顔がいっぱいです。以前にはこんなに賑やかだったのかと懐かしく感じられます。そろそろコロナ禍も収束してきたことから，また以前の楽しい時代が再開するでしょう。みなさまとネット上ではなく直接にお会いでき，楽しい時間が過ごせることを心から願っております。

橋　本　一　郎（医学部34期）

編　集　広報委員　橋本　一郎（34期）　大塚　秀樹（40期）　工藤美千代（33期）　高橋　浩子（34期）
田中　克哉（36期）　板東　　浩（27期）　森岡　久尚（45期）
学生委員　倉良　詩夢（医学科６年）　福本　和生（医学科６年）

非　売　品

青藍会会報第100号

令和４年12月22日印刷
令和４年12月27日発行

発　行　徳島大学医学部医学科同窓会青藍会
〒770－8503　徳島市蔵本町３丁目18－15
電話（088）633－7109（内線2601）
FAX（088）633－3180（青藍会事務室）
E-Mail　seiran@tokushima-u.ac.jp
URL　https://www.seirankai-tokushima.jp/
振替　01680－4－8671
ゆうちょ銀行 一六九店（169）
当座 0008671 青藍会

発行者　青藍会会長　荒　瀬　誠　治

印刷所　グランド印刷株式会社
徳島市万代町６丁目20－15　電話（088）622－8448